

家庭・保育所・幼稚園

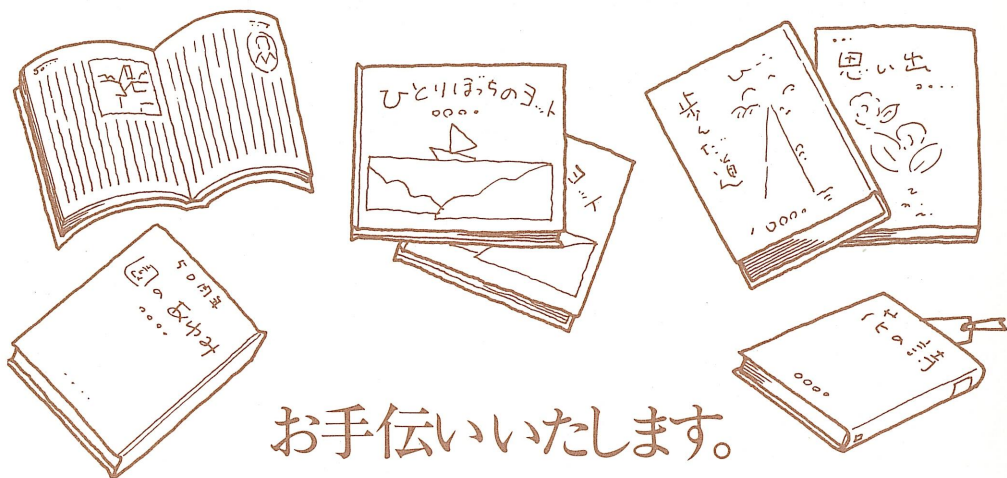
幼児の教育

4



第八十四卷 第四号 日本幼稚園協会

記念の本づくりを 自費出版 なさいませんか。



お手伝いいたします。

●内容、装幀、部数など思いどおりになる自費出版。手間のかかる編集作業は、キンダーブックや優良保育図書、雑誌などを手がけてきたプロの編集者がすべてお手伝いいたします。

●お気軽にご相談ください。

●完成したご本については、小社の宣伝ルートを通して全国にご紹介いたします。

- *****
1. 本の内容は…… 自叙伝、童話集、絵本、園の記念誌、研究集録、随想集、作品集など、ご随意に。
 2. 製作部数は…… 1,000部以上がお得ですが少部数でもお受け致します。
 3. 製作期間は…… 原稿頂戴から完成まで、約3カ月見てください。
 4. 本の大きさや体裁は…… 大きさはB6判、B5判、A5判など。製本は、上製本から並製本カバーつきまで各種あります。お好みのままに。また表紙などはご希望のセンスを尊重してご相談に応じます。
 5. 本文は…… 原稿用紙に書かれたものでも、テープに吹きこまれたものでも、結構です。綺麗でわかりやすい組み方にいたします。
 6. 絵や写真は…… もちろん結構です。カラーのご相談にも応じます。
- *****

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレール館 記念の本づくり係 〒101 東京都千代田区神田小川町3-1
TEL 03-292-7788

(ご連絡はお近くの小社代理店・事業所にどうぞ)

幼 児 の 教 育



第八十四卷 第四号

幼 児 の 教 育 目 次

— 第八十四卷 四月号 —

© 1985

日本幼稚園協会

終生を支配する幼少年時代の体験……………太田 愛人…(4)

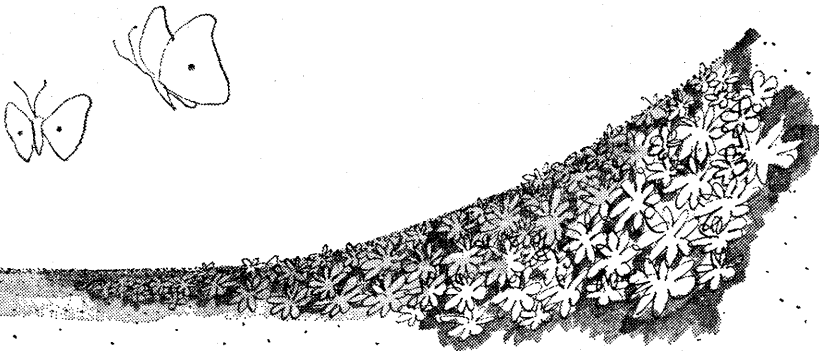
養護学校の日々……………津守 真…(8)

SF的読み解き

子どもという風景 (3)……………堀内 守…(15)

近代短歌に現われた子ども (二十四)……………大塚 雅彦…(25)

兔園随筆⑧……………蕪木 寿江…(34)



子ども・母親・保育者……………守永 英子…(38)

教育実習ノート……………(42)

若いお母さんたちへ……………塚田 幸子…(45)

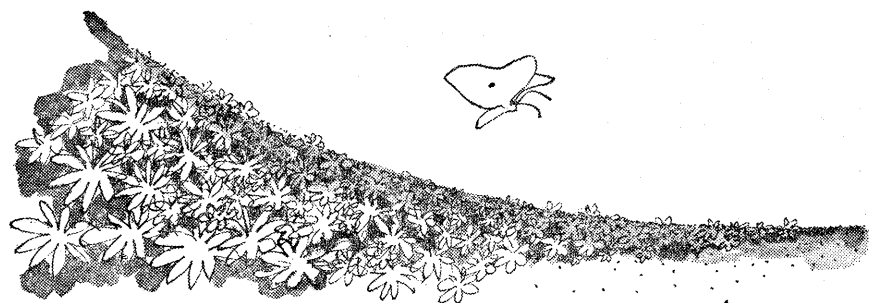
子どもたちのこと……………大橋利恵子…(52)

もうひとつの保育園……………浜口 紀恵…(55)

「迷い子」の話……………M・H…(57)

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』(岩崎美術社刊) より

カット・福田理恵



終生を支配する

幼少年時代の体験

太田 愛人

幼少年に対する保育教育が、さまざまな方面から検討されてきている昨今であるが、問題は常に知に偏重していくのが日本的現象のようである。生活経験を大切にしなければならない幼時期に、とかく文字を覚えることが優先し、身体の発育がさかんな少年期において、生活感を伴わない知育が先ばしりをしている。本来、知と共に発育するはずの五感の衰退現象が、幼少年時代から始ま

るといふ恐るべき状況に子供たちがおかれていると見てもいいであろう。味覚ひとつとっても、一見、文明の進展期と見られている現代において、画一化したものを半ば強制的に食べさせられているのを、教育の現場で目撃することができ

る。幼少年時代における身体的な事柄が、成人してから大きな影響を与える例は、食生活ひとつとっ

でも考えさせられるが、こうしたフィジカル（身体的）とは別に、メタフィジカル（精神的）な面を見すごしにされてはいないであろうか。

表題に掲げた言葉は、新渡戸稲造が『人生読本』の中に収めた一連の文章につけた題名である。これは昭和九年、実業の日本社から出版された本で、その時、新渡戸は死去していた。いわば新渡戸の晩年の感慨を淡々と述べた人生論で、読む者を、しみじみとした人生観照の世界に導いてくれる作品である。

新渡戸は揮毫を求められると、喜んで筆を執る人で、私の処にも軸がある。私の友人の弁護士事務所にはロングフェローの詩の一行を毛筆で横文字を書いた扁額がある。これまでに私の見たところでは、左に掲げた和歌を書く例が比較的多いようである。

見る人の心々に任せおきて

高嶺にさめる秋の夜の月

私は新渡戸の作と思っていたが、新渡戸二十何歳のころ、初めて読んだ古歌の引用であることを知ったのは「終生を支配する幼少年の体験」を読んだあとである。歌や俳句や詩に託して自分の思想を表現しようとする試みは、新渡戸の得意な方法で、大著『農業本論』の中で、農を説明するのに詩をもつてする手法が多いのに驚かされる。当時の書評に詩の引用が多いことを指摘されると、新渡戸は、詩歌は最もよく人間の心を表現している、と弁明している。

この古歌を引用したのは、次のような幼少年時代の挿話に由来している。そこは幼少年時代の心や感情がいかに大切であり、分別ある大人といえども立ち入ることが許されない世界があることを淡々と述べている。

「小遣で兄の為に買った手袋」という小見出しの文章の冒頭に一つの問題を提起している。「実に子供の時の印象ほど強く且つ長く残るものはない

い。或人は人の性格は五つ前に定まるといふたが果して何歳にして定まるものかは研究家に任せて、自分の体験に依つても、兎に角十四、五までには大概の思想の傾向が解るかと思はれる」と前置きして十一、二歳の頃の事件を回想している。

要約すると、病身の兄と共に東京の叔父のもとで勉強していた稲造は、丈夫なからだをもち、時には三歳上の兄をとちめてなぐることもあった。病める兄のため、叔父からもらった二十銭の小使錢で、銀座尾張町の唐物屋から安売りの革手袋を買う。普段の十分の一の値だから買えたのである。塾に帰っても次の日曜日まで風呂に入れず、煎餅も団子も食わず自分では兄孝行したつもりでいた。しかし次の土曜日に叔父の家に行くと、家の空気が重苦しく不愉快で、叔父から夜中に起こされて、いきなり拳骨でなぐられた。叔父の言い分は「貴様は何といふ心得違ひするのだ。他のことなら兎に角、他人のものに手をかけると

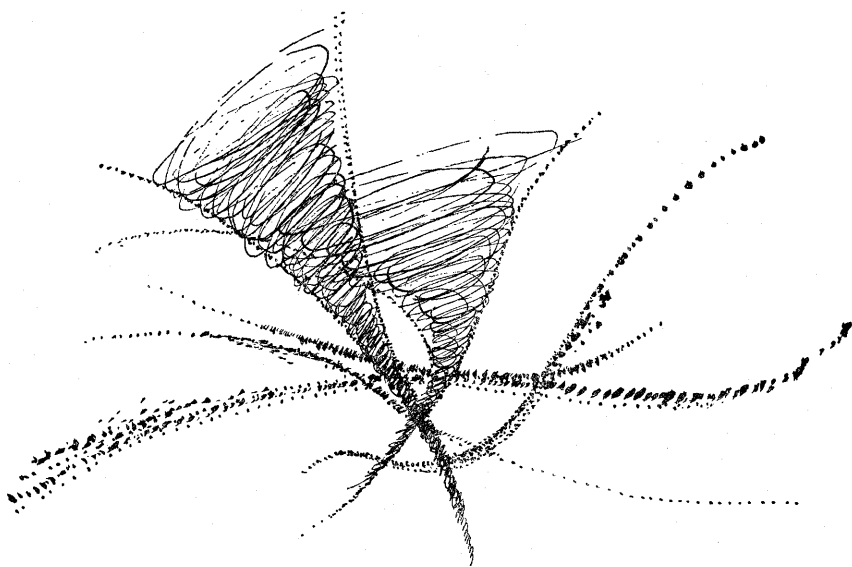
は、もし国のお母さんに聞えたら、私も申し訳がない」というのである。叔母は「証拠があるから駄目」と言い訳を拒否する。理由は兄のために買った舶来の手袋が二十銭で買えるわけがない、というのである。また一週間、小使錢なしで済むわけがないからきつとよそからお金を取って来たか、家から持ち出したのだろうと面責されたのである。

この時の感情を、晩年の新渡戸は「何といふ言葉で以て形容すべきか、この叔母さんは邪見な人だ、我々兄弟にとっては継母の如き人だと、くやしきもあり悲しくもあり、事実を述べて、かの銀座の店に連れて行きて身の証を立てんと思つたが、先ずこれもやめよう、彼女の思ふままに任せやう」と思い絶対の沈黙を守った。というのである。その時の決心を忘れることなく、老年になつても一身の弁護をしないのは十一歳の時からの癖である、と述べ、右の古歌を発見した時、「これ

なる哉これなる哉」と思ったという。

少年時代の決心が老年まで続く稀有な例をここに見ることができる。ここには知を超えた情、意の世界を垣間見ることができる。こうした情、とくに意を訓練し、導くためにいったい何があるのかを改めて考えさせられる。新渡戸の場合『武士道』に表明された訓練をあげることができるが、現代のような古いしきたりを見失い、宗教に無関心な時代に、何によって意志を練りあげることができるか、を改めて考えさせられる。新渡戸の肖像のある五千円札を手にして、それぞれの幼少時に感慨を及ぼすことも決して無意義ではないであろう。

(上星川教会)



養護学校の日々

一学期の危機

一学期には、子どもも落着かず、不安定で、大人も子どもを理解できず、困惑のまま大変な日日が長くつづくことがある。

小さい人の髪を引張る子ども、ひたすら大人の背に負われることを求める子ども、大人に字を書かせつづける子どもなど、どの子どもも、本人としては、そうするよりほかにないように動いていた。けれども、その活動には

津 守 真

満足感がみられず、その中であって、保育の手ごたえのなさに、私はあせりを感じていた。ただ、それぞれの子どものようにすることを受けとめて、一日一日を過すほかなかったが、事態は容易に好転しないように思えた。

こういう時は、保育者にとって危機である。外部の目からも乱雑に見える場面も多いと思うし、保育者自身もこれでよいと思っていない。あるときは、これらの子どもは保育の対象としてはあまりに病的なのではないかと

思ったり、あるときは、環境のつくり方や、保育の方法の欠陥によるのではないかと考えたりする。こういうときに、こうしたらよくできるという公式や理論を与えられたら、それにとびついてしまうかもしれない。また、子ども自身のことよりも、保育の場の秩序をつくることの方に、エネルギーを注ぐことにもなる。しかし、根本は、子ども自身が満足して生活できるようになることであり、人間として成長することである。それを見失うことになったら、それは保育全体の危機である。

保育者は、子どもの生活の中に組みこまれてい存在なので、子どもがゆきづまり困惑していると、保育者もゆきづまってしまう。保育者が希望を失い不安定になると、子どもも困惑の度を増す。子どもと保育者とはパートナーであって、一方が下降すると他方も下降し、相互に落ちこんでしまう。子どもが落ちてゆくときには、大人もまた、立ち上れないほどになることを、私は、身のまわりの幾人もの保育者に見てきた。しかし、同時に、その最底辺から、事態が好転することも、何度も見てき

た。この一学期は、私自身、その片鱗を体験できたときであった。

保育者がゆきづまったとき、子どもと取り組みつつけながら道を見出してゆく力は、どこから生れてくるのか。第一には、どんな子どもも、かならず自分から能動的になり、自分自身の生きがいを見出し、それぞれの子どもなりに他人と相互性をもって生活できるようになると確信することである。その確信は保育者の勝手な独善ではない。保育者がそのように信じて子どもに接することは、子どもの側からいうならば、子ども自身の力が信頼されることである。内心では大人から見放されながら、形の上で大人の社会の規律に従うように強制されるのではない。どんなときにも、自分が人間として信用されていることを、子ども自身が知ることが前進への第一歩である。

第二には、一緒に保育をする人々が、互いに弱点はあっても、その人の労苦を察し、その人の認識と決断を尊重し、共に考えることである。たとえ職場の先輩であっ

ても、他の保育者が困惑しているときに、解決法を教えることはできない。まして、子どもと大人の当面している問題の内面にふれずに、外的秩序を回復することのみに着目したのでは、真の解決にならない。それぞれの子どもの生活と人間とを育てることを根本にすえて、保育者が互いに支え合うような、保育のコミュニティをいかにして形成するかは、個々の保育者の課題であると共に、それぞれの保育施設の課題である。

第三に、子どもを人間として育てることの実践と研究を不断に追求しつづけることは、社会に共通の課題であることの認識である。個々の保育者、保育施設、家庭は、孤立してあるのではない。むかしから、世界中に、同じ努力をしている人々が、有名無名を問わず、たえずいることを思い起すことができる。

現実には、保育の日日の困難があまりに大きいとき、これらのことを忘れて、自分の場合にはこれはあてはまらないと思ってしまう。しかし、どんな子どもも、人間として育つ可能性に例外はない。普通の子どもも、重度

の障害をもった子どもも、精神病的な子どもも。日日、具体的な保育の場をひとつずつ積み重ねる中で、子どもの自我が形成され、大人の自我も強められてゆく。

人形の目

前回に述べたS夫やT夫と並んで、活発に動きまわる子どもにH夫がいる。大人の手にマジックペンを持たせ、壁面に字を書かせることが一年以上も続いている。そのH夫に、一学期の四月の末から、違う種類の行動がさしはさまれるようになった。

H夫は、そのとき手があいていた私の手をひいて、遊戯室の隅にゆき、「ネンネ ネンネ」と云って私を押し倒し、床にねかせた。H夫が私にこのようにして近寄ってきたのは初めてなので、私はうれしく思いながら横になった。それから、私のわきに人形を並べた。ぬいぐるみの人形、プラスチックの人形、大きい人形、小さい人形などを、口でチュとキスしてから下におく。私も、その人形のひとつにキスすると、いそいで来て、その人

形をとり床におく。こうして二十くらい、人形を並べた。こうしているときには、いつも気ぜわしく要求する字を書かせる行動に固執することもない。落着いてゆっくりしていて、私もゆっくりした気持で、H夫としばらくの時を過した。

H夫が私を床にねかせて、人形をそのわきに並べたとき、私も人形のひとつになったような気がし、人形も私と同列の存在であるように思えた。H夫の目にも、人形と私との区別はなかったのではないかと思う。人形を人間として見ているのか、私を人形として見ているのか。ふだん他人と、親しんで遊ぶことの見られないこの子どもは、人形という媒介物を通して、人と接しはじめたのだらうと思う。子どもは、人形に対して、したしみや嫉妬を向ける。人形は、子どもの感情をうけるが、否定的な意志をもった反応をしない。子どもは、実際の人間に対するよりも、人形に対してもっと安心して接することができる。

一学期の四月の末、私は、子どもたちが遊ぶ状態にな

らず、少しも変化が見られないように思えて、少なからず暗い気分になっていた。この日、私は、この子どもたちが、遊びによって自己実現するようにというより、たとえひとときでも、それぞれの子どもなりに快くたのしんで過せる時がもてたらと願いつつ保育の場に臨んでいた。H夫に手をひかれて床にねかされたとき、私はその時を子どもとたのしみたいと思っていたし、H夫も、人形と同じように快さを受けとめてくれる人間を見出していたのかもしれない。

こうして過したあとは、全体に満足な気分なのだらう。H夫は、別の部屋でおもちゃ箱の間に坐りこみ、気に入った物を手にとっては投げて、ひとりで過していた。けれども、その時間は長くはつづかない。じきに、いつものように、大人に字を書かせることをはじめる。まだ遊びとは云えないような単純な行動であるが、ひとりで落着いて過す時間がもてるようになったことは、H夫の生活の著しい変化である。

それから一週間後、帰りぎわに、H夫は私の手をひい

て、ホールの一隅のぬいぐるみや人形のおいてあるところにゆき、目の開閉する人形を私の膝においた。そして、私の手にはさみをもたせ、人形の目をはさみの先で開閉させる。私のはさみを一寸でもはなすとだめで、

「はさみ はさみ」と云う。私は、最初、はさみで髪を切ることの要求かと思い、髪を切ろうとすると、そうではない。人形の目をはさみで開いたり閉じたりしてみるのが、それもあまり満足ではない。開閉する眼瞼をはがしたいらしい。私は、その要求にはこたえかねて、「お人形さんはえらいねー。Hくんに目をいじらせてくれるんだから」と云ったりする。傍にいた男性の実習生が、「ぼくには、とてもこの相手はできない」と云う。迎えてきた母親がそばにきて、「うちでも髪を切るが大へんで、自分がいやなことを、人形にやってるみたいですよ」という。

H夫は、人形の目をはさみで開いて、更にそれををはがしたい。大人の心はそれには抵抗を感じる。たとえ人形でも、可愛らしい女の子の柔い目に、金属のはさみをあ

てることには、大人の感情が許さない。大人は人形に自分の女性像を映して見ているからである。子どもが人形の目をはがすことを要求するとき、人形を物としか見ていないのだろうか。一週間前に、人形と私とを床に並べたときのことを考えると、そのときには人形に対して人間に対するのと同様のしたしみを感じていた同じ子どもが、今度は人形に物体以外のものを感じていないとは考えにくい。むしろ、人形に人間的感情を感じているからこそ、人形の目をはがそうとしているのではないだろうか。

はがすという行為には、表面に付着しているものを取り除くこと自体が目的である場合と、はがすことによつて、その奥に何があるかを探ろうとする場合とある。H夫は、以前から、セロテープやガムテープをはがすことを好む。たとえば、長椅子の表面の破れをガムテープで貼って修理すると、そのテープをはがして、中の蕎_{そば}までも出さないと気がすまない。また、二年前、五才のクリスマスに、サンタクロースのお面をいちはやくはぎ取る

うとしたのもH夫であった。仮面の奥には誰か他の人の顔がかくれていることを彼は認識していた。H夫は、はがすこと自体に関心があるのではなく、貼ってあるところの向う側に何かがかくされていると思い、それを探ろうとしている。

H夫が人形の目をはがそうとするのは、動く眼瞼自体に関心があるのではなく、開閉する目の奥に何があるかを見ようとしている。実物の人間に同じことをしたならば、拒否的な反応に会うことをおそれて、何でも受けとめてくれる人形に、願望を実現するのである。

人形の目をはがしてその奥を見ようとするのは、大人だったならば、他人の真意を疑っているときに、化けの皮をはぐと表現されるときに似ている。H夫は、大人は何かをかくしていると思っっているのではないだろうか。このことは、そのときにはまだ十分に私は認識していなかったのであるが、その後に展開された数々の活動によって、次第に明瞭になってきた。たとえば、いじられては困る物を、そっとポケットに入れたりすると、

す早く気が付いてとんでくる。また、戸棚の中の物を出して、徹底的に奥まで探す。

人形の目をはさみではぎとうとするH夫の傍にいて、人の偽りのない本心にふれようとしてできない苛立ちのあることを感じさせられた。

次第にわかるようになる過程

五月の連休がはさまり、他のクラスの職員が病気で休んだので手伝いにゆき、その次にH夫に会ったのは、十月以上たってからであった。私がホールにいと、H夫は私の手をひきにきて裏庭にいった。樹木の皮をはぎ、マジックで木の幹に字をかいいたり、私に書かせたりする。字をかかせはじめると長くつづくので、大人はそれとつきあう覚悟をきめながらも、早く終ればよいと願ってしまふ。H夫が室内に移動したときに、私は通りがかりにマジックを靴箱の上において、部屋に入った。H夫はマジックを探しはじめ、私のポケットに手をいれて探す、見つからないので庭に走ってゆく。私はH夫にだ

まってマジックを置いてきてわかったと思い、靴箱の上にあることを告げ、H夫はマジックを持って部屋に入った。床に坐って、そこにあった絵本の絵の部分を台紙からはがしはじめる。最初は、絵を印刷した紙の後には何があるのか探索しているうちに、はがすこと自体が遊びとなってくる。私が傍に坐っていると、落着いて絵本をはがすことをつづける。

こうして、マジックで字をかくことや、はがすことをつづける子どもとつき合いながら、そのこの意味をつかみきれず、私自身の行動もときに不安定になってしまふ。そのために、子どもにとってだいじなマジックを途中に置いてきてしまったりする。私の側のこの不安定さが、はがす行為を助長することになっているように思われるが、そのときにはそれに気がつかない。

それでも、私が傍に坐っているの、H夫は、かなり長い時間落着いて、ひとりで絵本をはがすことをつづけていたのだと思う。私は、そこに坐しているうちに、自分も何かをしながらそこにいるのがよいだろうと考え

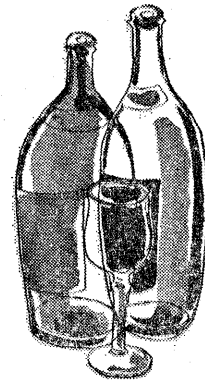
た。字をかかせることと、はがすことを好むH夫だから、ビニールテープで字を作ってみようと思い、H夫の好む字「三和銀行」を切り、机の上に貼った。そのときには、字をかかせることへの興味が、ビニールテープで貼ることへと転換しないだろうか、かすかな期待があった。しかし、それが浅薄な考えであったことにじきに気付かされることになった。H夫は私のテープ貼りを一寸見ていたが、それをはがし、マジックで三和銀行と書かせた。この字は、じきにはがれたり消えたりするものではだめで、永続的に刻印されていなければならぬ。だから、これまで、じきに消えるサインペンでは承知せず、消えないマジックで壁に書くことを要求したのだと思う。

こうした日目を積み重ねる間に、私はH夫にとってのこれらの行為の意味を徐々に理解するようになったし、H夫もまた、私が故意に何かをかくそうとしているのではないことを、次第に信用するようになってきた。そして、次の生活への変化が生れることになったのである。

SF的読み解き

子どもという風景

第三回 語部たち



堀内 守

1

時の交錯

語部。カタリベと訓む。

この語を読むと、さまざまなことが想像される。つぎからつぎへと想像はふくらんでいく。やや妄想の気味があるが、この妄想はなかなか捨て難い。

普通の国語辞典などには「語部」については以下のようない説明がしてある。

「上代、文字のなかったころ、朝廷に仕えて、古い言い伝えや伝説を語り伝えることを職業とした一族」

すっきりとした説明である。ちゃんと刈り込んで、整然と説明している。妄想を楽しんでいた者は、こういう説明に出会うと、一瞬恥ずかし気な気分に入られる。

辞典のすっきりした説明は、よそ行きの衣裳を着けているようで、立居ふるまいが立派である。これに對して、妄想の方は雑談のようなもので、あらぬ方へ広がって行く。とうてい人様の前にお見せするようなものではない。

そんな氣になつてくる。しかし、少々角度を変えてみると、この妄想の群も捨てたものではないように思えてくるからふしぎである。妄想を妄想であると承知の上で、少しばかりていねいにおつき合ひしてみるのである。そうすると、あの辞典の説明だけではわからない面白い面が見えてくるようである。

語部というと、稗田阿礼ひえだのれなどが思い出されよう。古事記選修に当たって、帝紀や旧辭を誦習よみならした舎人とねりというのが歴史辞典の説明である。

阿礼についてもいろいろな説明がなされている。長い伝承を暗記していたというから相當な年齢に達していたかと思うと、実は当時二十歳だったというような解説もなされてある本もある。こうなると、若者のイメージで

ある。聡明だったに違いないが、どんな調子で語つたのだろうか。「誦習」という説明用語ではわからないが、阿礼が淡々と語つたということはないだろう。

そこで妄想が働き出すのである。そして、こういうときの私たちの身も心も次第に通常のカミシモをぬいで、活氣をもつてくるだろう。のみならず、もし私たちが素直にわれとわが身を反省してみれば、そのときの私たちの構かまえは、職業といえヨロイを外し、他人の目も氣にせず、ひとりで憩い、ハメを外し、悦に入り、觀念と戯れ、ことばと戯れているはずである。

阿礼について言えば、古事記編纂のころ二十歳ぐらいだったという説のほかに、実は女性だったという説もある。そうなると、古事記にまつわる私たちのささやかな知識も組み替えざるをえなくなろう。年をとつた語部のイメージよりも、若き女性のイメージが浮きあがってくるからである。

ささやかな知識という積み木をくずすのはわけはない。それを正しいと信じていなくともよいし、信じてい

なければならぬという義理もないから、このふくらみ行くイメージにおつきあいしてみるのである。特に気になるのは、その場合の阿礼の容姿よりも声である。声はどんな声だったか。高齢な男性のしわがれ声でもなく、若き女性の声だったとすれば、説話、伝承の類を語るところの語り口は、声は艶やかに、張りがあり、音域も広がったに違いないのである。のみならず、調子よく進みはじめたら、身ぶり手ぶりが語りに参画したことであろう。それを懸命に筆記していた太安万麿たちは、時には彼女の語り口に聴き惚れてしまい、筆記するのを忘れたこともあったに違いない。

かりにそうだったとすると、「あ、もういちど、はじめからやり直してくれ」というようなこともあったことだろう。

筆記する方は、今日の速記のようにサラサラとやることができたとはいえない。一行語ってもらって書き記し、さらに復唱してもらっては書き進んでいったに違いない。さてそうなれば、ここにこんなことも起り得たは

ずである。いや、かなりの確率で生じたと考えることができる。書記生たちが坐り机の前に長時間坐っている。そんな時、阿礼の語りを一寸一分まちがいに書き写したとは考えられない。

書きことばという格^{こう}子

「いずれのおん時にやありけん。そうそう、あれは去年の三月。桜の頃。三斗三升の酒飲んで、三人三様の笹かつき。笹山さやにさわけども、散々酔うて千鳥足。さ、よろしゅうございますか。あ、まだ。では、もう少しお待ち致します。」

書記生Aの筆記せし文「去年三月、三人の男が酒を飲んで、笹を売って歩いた」

書記生Bの筆記「いずれの時からからねど、桜の頃の話なり。三人揃って酒^{さけ}飲んで、笹の音聴きつさらざらと」(Bの独自。「これは調子が揃ってきた。以下、この調子の枠内にきちんと収めていくことにしよう」)

書記生Cの翻案せし文「さてさて、その場の人びと

は、三人三様の服装で、酒をささささ勧め^{すす}合い、さつさと歩む足どりよ。

『さ、よろしいか』『あ、まだか』

『では待ちましょう、待ちましょう』

書記生Dの創作せし文

「あれはいつの頃だったか」と彼女は考え込んだ。

『あ、桜の頃だったわ、桜で思い出した。あの時、あら、おかしい。三人の貴公子がお揃いで酒など召しあがって……』

彼女の目には、あの時の三人の戯れ方がありありと浮んできた。笹の葉を手にとって戯れていた三人の男たち――いまはもう遠くに去ってしまった人びと。

『待ってます』と言ったはずだったのに」

書記生Eの戯^ざれ文

『あーあ』と阿礼はあくびを噛みしめて書記生たちを見やった。一人ひとりが筆の運びが違う。一回語ればすぐに筆を運ぶ者もいた。三回同じところを語っても、まだぶつぶつ口の中でことを繰り返しながら、ゆっくり

と筆を運ぶ者もいた。顔つきもまちまちであった。待っている間、阿礼は退屈をまぎらすためにことをいくつも付け加えたり、消略したりした。

書記生たちは時折しわぶきをする。阿礼にそれが彼らの信号のように思えてならなかった。『速すぎる。もっとゆっくり語れ』というようにもきこえた。『もっと大きな声で語れ』というようにも響いた」

書記生Fの筆記したもの

「(阿礼の声、調子よく)

いつ頃だったかとおたずねですか。そうです。去年の三月でした。まだ桜の咲き初めた頃、三人の方が三升ものお酒を召されましてね。いや、「三斗」というのは大仰な言い方です。大げさに表現した方が面白いというので語呂を合わせたのでした。

それほど、あの三人の方は上品に冗談を言い合っておられました。(阿礼、沈思)」

太安万曆の話

「いやあ、編集者としてはですな。責任が重大なんです

よ。何せ天武天皇という個性のお強い方がご自分の地位を確固としたものにしたいというお考えにより命じられた仕事ですからね。ところが、責任者である私が見ていきますと、書記生たちはまだ不慣れなものですから、どうもうまく書き取れない。十人十色、三人三様、まったくそれを正しい表現と判定していいのやら。以上はオフ・レコにしておいてよ。

さて、以下は発表してよろしい。

かねてから着手された古事記の編纂は、着実に進み、編集長太安万麿氏は、語り部たちと書記生たちの協力を大いに讃え、見通しは明るいと語った」

数日後の記事

A紙、トップに大見出し。「古事記編集の壮挙。着々進行、太編集長、自信表明」

B紙、三面、囲み記事。「古事記の編集、意外なところに陥穽。編集長もガックリ」

C紙、社会面、「編集長のユーモア。古事記の編集の

裏話。若い者の統率の楽しさ。『苦勞するネ』と太編集長の笑顔」

D紙、「噂、ウワサ」欄。「もうかなり進んでいると思われる古事記の編集作業は意外や意外、準備不足もたつたか、一日かけてもわずか数行しか進まない。秘められたこのニュース。本紙独占、特ダネ。編集長、憮然。読者の知る権利に答えよ！」

2

醒めてみて

妄想も無駄ではない。語部は一人ではなかった。集団をなしていた。のみならず、集団ごとの流儀スタイルを編み出していた。古代ギリシアのホメロス―あれは個人の名なのか、それとも語部たちの集合名詞だったのか。そういえば、ホメロスをもって盲目の吟遊詩人に引きつけて理解する説もある。偶然か、阿礼を盲目の人として理解する説もある。あれほどの大きな内容を誦んじることができ

たのは並の人間のことではなく、注意深い、神経の鋭ぎ澄まされた人でなくては不可能だという推理が両者を盲目の人に仕立てあげたのであろう。敬愛され、同時に並の世界の人でない人（異界の人）という畏れが複雑にからまり合っている。

何千年も、何百年も前の有名な人を思い出さずとも、私たちの身のまわりには語部が多かった。限りある話題を、相手かまわず繰り返し語る年寄りたち。噂の伝令使、「世間」の代弁者、「先祖」の代言人たち、「物知り」と評判の高かったご隠居さんたち。

語り口にも特徴があった。

無駄口

多くは生業と直接関係のない話題であった。「生業」を厳密に解釈すると、私たちのコミュニケーションの大半は「余分」なことにかかり合っている。しかし、生業そのものに彩どりを与え、それを活気づけるものは「無駄口」であり、「見てきたような嘘」であり、「噂

話」であり、そこに存在しない他人に関する「悪口」であるようである。

平凡に時が流れていくような社会においても、これらの「無駄口」はいくつも型を生み出している。それが洗練されて、いつのまにか、しかるべき場に適った、しかるべき語りが形を整える。その多くは、語りというよりは唱えという共同の斉唱を残している。だれかが一口唱えていくという念の入った祈念あるいは誓いのことば。それが、しかるべき場から独立していくと、語りが生まれる。

面白いのはその段階の語りが多分に唱えの要素を含み込んでいくということである。

第一、そこにはリズムが残っている。調子、間合い、音のアレンジの仕方。だから、筋の面白さよりもこちらの方を味わうことも可能になる。

「いずれのおん時にやありけん」↓「いずれの、おん時にや、ありけん」↓「いずれの、時にや、ありけんや」「さてさて、いずこの時なりや」↓「さあさあ、皆さん

寄っといで、とんとわからぬその昔、昔々のその昔、そのまた昔のその昔」↓…↓「昔、昔あったとき」↓「昔、昔、あったとき、ほら、あったとき、土佐の高知の知の高さ、傘は傘でもデモクラシー、暮しは暗し、倉はなし、……」

第二、そこにはカケアイの要因がつねに造出されている。演者は孤立してはいない。かならず、聴き手と呼応している。そして、当初は語り手と聴き手というように機能の上で二つに分かれていた者同士が、ある段階に達すると、たがいに相手側を挑発するようになり、やがて合唱あるいは即興の創作にまで発展したりする。

第三は、そこには日常の世界とは異なる第二の世界が現出するということが挙げられる。「第二の世界」とは可能的なものとは限らない。むしろその特徴は不可能であることに求められるかもしれない。だが、まったく見えないということでもない。要するにリズム的なのである。したがって、調子が合えば、だれでもいつのまにか参動してしまっている。

だから、かりに語り手が独演しているように見える場合でも、聴き手の方の心の中では語り手の語りに応じ、物語が演じられていると考えることもできるのである。

3

語部と哲学者

身近な語部たちは、近所の老婆、老人たちという姿をとって現われることもあった。また、書物という形をとって現われることもあったり、まれに教師という形をとって現われることもあった。両親も語部の姿をとることもあった。

その世界は、すでにのべたように「第二の世界」である。鳥獣が物を言い、木や竹までが物を言う世界であった。私たちはそれを今日では「童話」のなかに押し込め、お伽話のなかにのみ存在するように思っている。だが事はそれほど単純ではない。もし、それらの「第二の世界」を一つの世界観とみなしてみるとしたら、私たち

は、祖父母や両親から聴かされた昔話や事の由来話のなかに、哲学者たちの解釈した世界とよく似た構造を発見して驚かされるだろう。

早い話が「自然」というイメージである。あえて概念ということはやめよう。このどこかすっきりしないイメージは、自然科学の洗礼を受けた人でも自然科学的な自然だけがすべてだと思ふことはないだろう。「宇宙」「天文」「進化」等々のどれをとってみても語部たちの語った自然像がまつまりついている。「原因」「結果」にしてもそうである。

語部たちは「因果」についてどう語ったろうか。古代ギリシアの哲学者アリストテレスの説明と田舎の老婆たちの説明とのあいだに大きなへだたりがあったのだろうか。

そんなことはない。

「原因」はつねに「由来」や「いわれ」「由緒」といっしょに織りあげられていたし、「因果」はつねに「因縁」や「果報」「応報」と絡まり合っていた。

アリストテレスは「自然哲学」という枠内で語っていた。田舎の老人たちはムラやマチという世界における経験をもとにして語っていた。自然、ネイチャー、ナチュール、プロダ……は名詞。だが、「自然」は、ある時は「無理」の反対であり、ある時は「蛮」の反対であった。人為の世界が自然の世界に投影されたものであることもあった。だが、どうだろう。これらのほかに「自然」には善という価値も含められていた。自然法である。そういう言い分をアリストテレスもムラやマチの老人たちも語っていた。

子宝、かすがい

隠喻も豊かだった。一つのできごとについての隠喻。

「子はかすがいだよ」「負うた子に教えられ」「子宝」。

それらを語る文脈も隠喻にあふれていた。どこまでが確固たる知識なのか、どこまでが楽しみなのか、境界は定かではない。何しろ、打てば響く人間関係のなかで交わされる会話なのだから。「子どもは風の子」「寝る子は

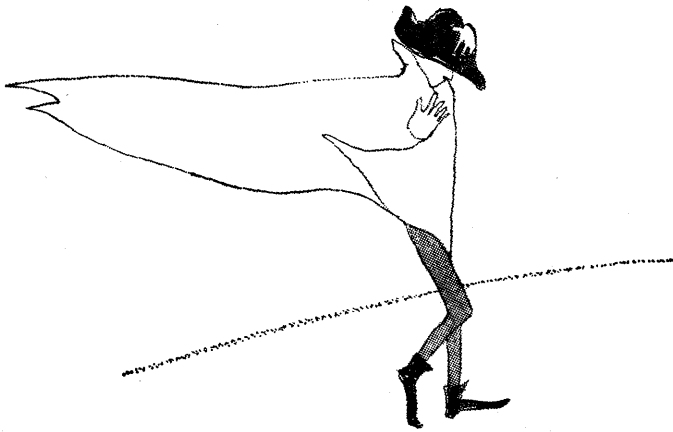
育つ」「泣く子は丈夫」。どこまでが大人の領分の話なのか。どこまでが真剣で、どこまでが戯れ言の世界なのか。騙りか。

いわばそれは揺籃の世界の風景なのである。

揺れている。快く揺れている。

かりに、それを朗誦してみることにしよう。ギリシア語の「テー、テス、テー、テン」を学ぶ必要はない。ローマ人が「ヴィーナス」と呼んだ女神はギリシア語では「アフロディーテ」という。その元の意は何と「泡」である。「泡」の連想が彼女を海から誕生したという物語に連れて行った。こういう遊戯をやるのは古代のギリシア人にはお手のものであった。どこまでが本気で、どこまでが遊びなのか。アリストテレスの『形而上学』と訳されている書物は名前からして難解そうだが、それは名前の音や文字によるところが多い。殊に訳語が人を驚かせる。

何のことはない。その原意は「メタ・フィシカ」アリストテレスは『フィシカ』（自然）という書物を書き、



その「あとで」、それを「超える」本を書いた。「メタ」とは「あと」である。それが難解な「形而上学」となるとはアリストテレスも知らなかったろう。

この『形而上学』は面白い本である。語の分析、用語法集。眠れない時はこの本をひもとくに限る。そして、少々むずかしいと思ったら、自分が接したおバアちゃんたちの語り口にひきつけて解せばよい。アリストテレスが、あのおバアチャン、このおバアチャンの口調で語っているように思えてきて、それまでわからないと思えていたところも、急に生き生きとしてくる。

いろいろな「世間知」について語部よろしく語ってくれたおバアちゃんたちの大半は「あの世」に去った。けれども、「あの世」でもぎつとにぎやかにおしゃべりをしてに違いない。

仕事の手を休めず、語ってくれた地獄の鬼の話、人さらいの話、要するに、異世界がいくつもこの世に口を開けていたのだった。

墓地、ゴミ捨場、寺の床下、古い井戸。これらは闇の

世界へ通じており、飲み屋、病院、工場は「五臓六腑」の世界の縮図だった。

寺の階段、神社の階段、学校の階段、家の中の階段。おバアちゃんたちの語りの世界では「階段」は成長や学校の隠喩だった。アリストテレスにとっても。アリ、リス、スト、トテ、テレ、レスにとっても。アリさん、リスさん、ストさん、トテさん、テレさん、レスさんにとっても。

(名古屋大学教授)

近代短歌に現われた子ども（二十四）



大塚 雅彦

（45） 戦犯の歌

太平洋戦争は戦争が終ってからも多く
の問題を世に残した。戦犯つまり戦争犯
罪人の問題はその一つである。その中、
連合国側の裁判によって裁かれた、戦争
を指導した東条英機を始めとする最高の
政治的責任者（いわゆるA級）について
は、比較的国民に知られている。しか
し、直接の暴行者（C級）と、その責任
上官（B級）で死刑（絞首刑、銃殺刑等）
や無期・有期刑に処せられた人々の問題
は、必ずしも充分に知られているとはい
えない。また、戦争犯罪とは何か、勝者
が敗者を裁くのは「勝てば官軍、負けれ
ば賊軍」の諺と同じで、納得できない点
が多いのではないか、という理論や考え
方もある。げんに、このBC級戦犯を中

心とする手紙、日記、手記、詩歌類等の遺稿六五〇余編を収めた『世紀の遺書』が刊行されたのは早く昭和二十八年十二月であるが、その中には無実を訴え、敗者だけが裁かれる戦犯裁判に不合理を感じ、この裁判は形式的なもので、判決は政策的なものに過ぎない旨のことを書き記しているものが少なくないし、最近この「世紀の遺書」が三十年ぶりに復刻刊行（昭59・8）され、私はそれを読み返してみても、複雑な思いにとらわれざるを得なかった。軍人の中にも例えば聖将とか仁将とか呼ばれた今村均元陸軍大将の如く、責任を感じて、戦犯者の無実を証明することや戦犯を守るために戦後の全生活を投入したような人物も居る（角田房子『責任——ラバウルの將軍今村均』昭59・5参照）。

このBC級戦犯のことを扱ったノンフィクションものには、今村の此の伝記本や、上坂冬子『巣鴨プリズン13号鉄扉』（昭56・3、最近「新潮文庫」にも入った）及び同『遺された妻——横浜裁判BC級戦犯秘録』（昭58・4）、岩川隆『神を信ぜず』——BC級戦犯の墓碑銘』

（昭51・5）その他があり、また、BC級戦犯を扱った文学作品にも吉村昭『遠い日の戦争』（昭53・10）を始め、すぐれたものが少なくない。

① 上坂の両著から

『巣鴨プリズン13号鉄扉』は、『世紀の遺書』の編さん委員会の中心人物であった冬至堅太郎（元主計大尉）からその本の贈呈を受けた著者がこれを読み衝撃を受け、米軍事裁判による巣鴨の処刑者たちの公判記録をひもとき、その何人かの生涯と刑死の状況や、遺族のその後の三十年間の動静などを詳しく追跡調査して、綴ったものである。このうち、本稿の目的である短歌を遺している者を取り上げたものは少ないが、藤中松雄の項に、同人が子どもをうたった作品

① 膳に載るリンゴに通う吾子の顔
匙さへ取らず見守りてゐたり

がある。藤中は『世紀の遺書』七〇〇頁以下に詳しく遺書が載っているが、福岡県出身の農業で、元海軍一等兵曹であり、昭和二十五年四月七日巢鴨で絞首刑、二十九才であった。沖縄県の石垣島の飛行場を空襲した米機が撃墜されたが、その際落下傘により降下した米飛行士三人を殺害した件で日本軍将兵が起訴され、一審で実に四十一名が絞首刑を宣告され、最終的には七名（将校五、下士官二）が刑を執行された。藤中はその下士官の一人である。遺書の中に出てくる孝一、孝幸の二児があった（九才と三才）ようで、この歌は処刑をあと半日後にかえた四月六日午前十一時半、田中教誨師から最後の食物について注文を聞かれ、果物を一つ欲しいと申し出て、リンゴが届けられたが、二人の愛児に宛てた遺書の上に、父の最後の贈り物としてこのリンゴを載せたのであった。歌意はこのリンゴの紅から、愛児たちの豊頬を想い、断腸の思いをしていることがわかり、涙なきを得ない。そして、藤中は子ども達に「戦争絶対反対」と「世界永遠の平和」のために貢献するように遺言してい

るのである。

『遺された妻』の方は副題にもある通り、BC級戦犯を裁いた横浜裁判の記録である。巢鴨プリズンで処刑された五十三名の中、十一名は独身であったから、当時は四十名前後の妻が残されたわけで、そのうち上坂女史が健在を確かめたのは二十四名で、大半がもう七十代になっているらしい。二十三名が夫の遺書の公表を承諾してくれたという。本書はこれらの未亡人のうち、再婚して他家に嫁いだので追跡をあえて避けた者などを除き、これらBC級戦犯の妻たちが、その後の長い三十数年の戦後生活をどう生きたかを描いたものであり、私は強い感銘をうけ、二・二六事件を起して処刑された青年将校たちの若かった妻らの、その後の長い未亡人としての人生を描いた力作、澤地久枝『妻たちの二・二六事件』（昭47・2、——その後、中公文庫にも収められた）と共に、私がくり返し読んだ本である。『遺された妻』の中にも、子どもを詠んだ歌をのこした処刑者がいる。

② ゆくりなく初面会に來し次男

永遠の別れと知らず帰るき

③ 長男の入試発表のこの夕べ

一つ星見ゆ獄の狭庭に

④ 遙々と我を尋ねて幼子の

会ずに帰る心淋しき

②と③は元海軍大佐井上乙彦の作である。井上は前述の石垣島捕虜殺害事件で絞首刑になった七名の中で、階級の最上位者である。神奈川県出身で、昭和二十五年四月七日に処刑された時は五十二才であった。遺書には、これ以上絞首刑を続行するのはアメリカのためにも世界平和のためにも有害無益であるから、私たちの処刑をもって最後にしてほしいこと、日本では命令者が最高責任者であって受命者の行為は、それが命令による場合は極めて責任が軽いのであるから考慮してほしいこと等を、

マッカーサー元帥あてに歎願している。②は、四月五日海兵帰りの長男が再出発のため大学を受験し、その発表日であったため次男が代役で巣鴨を訪ねた。陸軍幼年学校から戻った次男は、新制高校生になっていたという。井上が処刑の呼出しを受けたのはその日の夜のことである。③の歌を見ると彼は入試結果を聞く術もなく逝ったと思われる。④は岐阜県出身の元憲兵中尉本川貞の作で、彼は昭和二十三年七月三日巣鴨で刑死、四十一才であった。二十年三月東京大空襲の日に、墜落中のB29から全身火傷を負った飛行士がパラシュートで降下したが、火傷はすでに手のくたしうがない状態であったのを、本川達は、防空壕へ運んで斬首によって処置したもので、それをとがめられて彼は絞首刑となったのである。最初の面会の日に妻は三人の子を連れて行ったが、子どもは面会不許可とのことで、本川は逐にわが子らに会えずに逝ったという。それをうたったのが④の歌で、この歌はトイレットペーパーに書き残したものと、上坂女史は書いている。

② 『世紀の遺書』

『世紀の遺書』編さんの経緯については前述の通りであるが、戦争犯罪人として絞首刑や銃殺刑に処せられた者は、日本内地の巢鴨ブリズンだけでなく、全部で五十ヶ所にも近い外地に於ても執行されている。刑死者だけで九〇八名に達し、本書巻末に挿入されている一覧表によれば、その他に病死・事故死・自決等を加えれば一〇六八名に達している。本書には彼等の遺稿が収められているのだが（上坂女史の著書に紹介されている短歌の作者らも、むろん本書中に入っている）、それは中国・蘭印・ビルマ・マレー・北ボルネオ・香港・濠洲・仏印・比島・巢鴨・グアムの順序に編さんされており、その戦犯裁判地や処刑地の範圍の広さに驚くばかりである。

彼等の遺稿の中に短歌を遺している者が、かなり沢山ある。しかしそれらを読んでみると多くは「人はよし悪しざまに我を裁くとも 直き心は神ぞ知るらむ」^あ「今更に 散る身惜しとは思わねど 心にかかる国のゆくす

多」式の古色蒼然たる類型的なもの、紋切型のものが多く、戦国時代の武將や明治維新の志士たちの和歌のたぐいかと錯覚させるようなものばかりで近代性に乏しく、率直にいつて日本人の辞世歌というものにまつわる古い想念や発想を露呈しており、彼等の心情には同情しつつも、その歌には、私は文学的感動を覚えない。中に、北ボルネオで刑死した関西大学法学部出身の憲兵大尉中田新一の「めし食べる 時間となるを唯一の 楽しみとして 今日も生きてゐる」「殺すなら 早く殺せとつめよ りて青き目玉をにらみ返しぬ」等の合計五十四首の「獄中詠」の大連作や、ラバウルで刑死した大阪帝大工学部出身の工兵大尉星島新一の「つばくらめ みえずみなみのこのおじま このことづてたがもちきたる」「戦犯の名になく妻子ただし 正しき我の世に知れずして」や、マヌス島で刑死した海軍大佐篠原多磨夫の「手錠はめて 同胞に会ふその時は から元氣もてほほえまむとす」や、先に引用したシンガポール刑死の京大生木村久夫上等兵の作品等が、淡々と構えなく素直に感情を

吐露しているのに、却ってその力みのなさ、質朴さが読者の心をうつのである。子どもをうたった歌も概ね様式的で個性がない作品が多いが、星島の前掲作品や、河合竹男（陸軍伍長、マニラで刑死）の

最夜中に ふと目をさまし幼児は

父の姿を求め泣くらむ

工藤忠四郎（陸軍大尉、マニラで刑死）の

「バカ」の背に 乗りつつ帰る子供等の

声かんだかく吾児の偲はる

等が、比較的素直に子ども思慕を詠している。

① 『巢鴨』

『世紀の遺書』に佳作が少ないのに比べると、歌集『巢鴨』（昭28・9）には、すぐれた作品が多い。これは巢

鴨刑務所内の「巢鴨短歌会」で歌作に励む修練があり、専門歌人の指導を仰いでおり、また専門の短歌結社に所属している人も少なくなかった為であろう。本書には歌人の鹿兒島寿蔵や阿部静枝が序文を書いており、巢鴨短歌会代表大槻隆と歌集『巢鴨』編集委員冬至堅太郎連名の「後記」がある。「誰に見せるためでもない、耐えに耐えた果てに洩れる独語であってみれば、巧拙は問題ではない。一日一日の苦悩をこの短い詩の中にたたきこみ、その上に立って私達は常に前途を正視することが出来た」という「後記」の中のことばは、この戦犯たちの短歌作品の持つ意味を端的に示している。

① 育ちゆく さまを一目を見せむとて

連れ来し吾子を椅子に立たしむ

（平尾健二）

② 残生を 子らにかたむけ書く手紙

百五十字に制限されつ

（森 良雄）

③ 再びは 会うことなけむ幼児に

年齢^{とし}などたづね われはをりけり

(森 良雄)

④ すでにして 破局をつけし半生に

残りし吾子が 妻に似てゐる

(毎田一郎)

⑤ 去りゆきし 母にはふれずひたすらに

われの帰りを 待つといふ子よ

(全)

⑥ すゑの子が まるまる太り

にくまれ言いふとし聞けば 心やすまる

(鳥巢太郎)

⑦ おぼつかなく歩める吾子よ 明日よりは

別れねばならぬわが胸に來よ

(岡内俊二)

⑧ 始めてを かなに書き來し子の手紙

壁に向ひてまた読むわれは

(冬至堅太郎)

⑨ 学友^{とも}みなが かたみに父を語るとき

黙^{もだ}にしをらむ罪人の子は

(全)

①の作者は九大医学部助教授で、昭和十一年以来の「アララギ」会員である。二十三年八月死刑の判決を受けたが、二年二ヶ月後、四十五年に減刑された。この歌は子連れて面会に來た妻と「網戸をへだてて」「ただ四十五分間」の面語した折の作で、「かぼそかる喉^{のど}ならして水のめるこの子の命とはに生かしめ」の歌が続いている。②③の作者も九大医学部卒、絞首刑判決より減刑され、重労働二十年となった。昭和二十四年から作歌を始めている。②は「死刑囚棟その二」、③は「死刑囚棟その三」の中にある。後者は面会の折の作品で「白き咽喉^{のど}見せて無心に吞む吾子よ生きの別れの水と知らなく」「旅とほく最後^{つひ}の別れと連れられし子は野球帽かむり眠れる」等の歌が続いている。④⑤の作者は米軍横浜裁判で終身刑判決を受けてから巢鴨ブリズンの中で作歌

を始め、「ボトナム短歌会」会員。判決から二年半後、妻の申し出により服役の身のまま協議離婚している。戦犯の中にはこの種の不幸をも味わう人が居た。長男（八才）は留守宅で祖父が養育中、とある。二首はそうしたトラブルを背景にして、残されし子が去って行った妻に似ているという微妙な感情を詠出しており、一人で父を待つその子を想う衷情を披瀝している。⑥の作者は、九大医学部卒、アメリカ関係の事件で最初は死刑、後に十年に減刑された。この歌は「面会」一連の中にあり、ほろにがい父情を吐露している。「まじまじと吾を見てゐし子は笑みて鬚が伸びていと妻に告ぐるも」「口数の少きままにひたぶるの眸はわれに向けをりし子よ」等が、⑥の歌の前にある。⑦の歌の作者はやはり横浜米軍事法廷で重労働三十五年の判決を受け、後に二十年に減刑された。この歌は「別離」と題する一連の中にある。

⑧⑨の作者は前述したが、東京商大（現一橋大）卒、中支に出征し一旦帰還したが、再度応召、二十年六月の西部軍司令部に於ける米軍飛行士処刑に参加し、それが原

因で二十年末、横浜法廷で絞首刑判決、一年半後、終身刑に減刑された。短歌は巢鴨に入り親しみ始めた模様で、死刑囚棟で前出の平尾健一等と歌会を始め約一年続いたが、死刑執行により逐次人員減少とある。⑧⑨は「着換へつつシャツ柔かに匂へれば一目を妻に会ひたくなりぬ」を冒頭とする「シャツ匂へれば」と題する一連の中にある。⑧の「始めてを」の「を」は添字で特に意味はない。⑨の「黙にしをらむ」は「黙って居るだらう」の意味で、戦犯の父親を持つわが子の衷情を思いやっている。なお冬至堅太郎は次のような歌ものこしている。

⑩ わが斬りし 米兵の妻子想ひをり

背冷えびえと壁にもたれて

自分が処刑した敵兵の妻や子を想いやっている歌はどの本でもあまりないので、私の記憶にのこるのである。

（お茶の水女子大学）

月曜日の朝

幼稚園の頃、日曜日の夜、制服とカバンを枕元に置いて、早く夜が明けることを祈った。月曜日になったら、幼稚園に行つて、きのう公園で見つけた変わった木の話をしてあげよう……。みんなきつと、ワッーと驚くだろう。などと思っていると、ちっとも時間が進まずに、何度も何度も、目を開けて、窓の外を見ては、一向に、明るくならない暗闇にいらつた。

小学校、中学、高校、大学と進むうちに、待ち遠しかった月曜日の朝は、できることなら来ないでほしいものになつていった。社会に出てからは、恨み事さえ言いたくなる月曜日の朝となつた。昔から全く同じ月曜日の朝なのに、あの心踊るような待ち

遠しさは、何だったんだろう。生きることのすべてを、楽しさの中に投入できたからだろうか。幼稚園の生活は、全身を使い、全知識をふりしぼらなければ展開されない。だからこそ、毎日、楽しかったのだ。毎日へとへとになるまで、真剣に生きていた。今日の次には、また別の新しい明日が、訪れる。それが楽しみでたまらなかつた。あのドキドキする感覚、どこに行つてしまったんだろう。

(T・O)

三月に

…………卒園する子どもたちへ…………

蕪木寿江

あした

泣きたくなったら 急いで おへそに

力を入れるのよ

すると涙が すーっと

ひっこんでしまうのよ

忘れ物したなんて ママのせいにして

泣くんじゃあないのよ

泣くとぼーっとなって

そばにいるお友だちも

裏の山の梅の花も

もうすぐくるつばめも

かすんでみえないわよ

「いいこと………」

ぼくの大粒の涙を みんな幼稚園の
お庭の隅に埋めて
あした卒園しなさい

きつと

わたしが 外を見ていたら
一人 二人 がそばにきて
窓の外を見ていたの
三人 四人 と見ていたら
みんなが走って寄ってきて
窓から外を見ていたわ
二羽の白鷺あとさきに

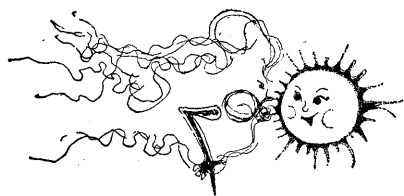
はばたく音が聞こえそう

空の色のいぬふぐり

わたしがかがんでみていたら
みんなもかがんで声かけた

北斗七星見ていたら

みんなもあの星見るだろか
指さす先を見るだろう



そうよね

「おひなさまの小さなケーキも

二人でわけると二倍おいしくなるのよ」

「じゃあ、三人でわけると

三倍おいしくなるの？」

「じゃあ、四人でわけると

四倍おいしくなるの？」

「そうよ」

「じゃあ、十人でわけると十倍？」

「そうよ……そうよね……」

春の雨が地面に浸みこむように

一つ一つのことばが

心の中にとどいていくのね

「百人でわけると百倍おいしくなるんだよね」

「ありがとう、せんせいたくさんのこと

みんなから教えてもらったみたい」

ころです

目の中に

光っているもの　なんでしょう

春のお空の　白い雲

ぽっかり浮かんだ　白い雲

目の中に

光っているもの　なんでしょう

夜空に　匂う　梅の花

開きはじめた　梅の花

目の中に

光っているもの　なんでしょう

友だちくれた　びーず玉

七いろ　八いろ　の　びーず玉

目の中に

光っているものなんでしょう

みんなが 持つてる ところです
やさしい やさしい ところです

「うれしいひ」のえほんをよんで

「ぼくの、うれしいひ って知ってる？」

「知らない」

「あのね、おかあさんにほめられたひ」

「あたしの、うれしいひ って知ってる？」

「知らない」

「あのね、まこちゃんと あそんだひ」

じてんしゃのほじょぐるまがとれたひ

おとうさんとおすもうしたひ

けんちゃんのおたんじょうびにいったひ

うさぎのあかちゃんをみたひ

おばあちゃんのかたをたいたひ

あやとりができるようになったひ

いもうととおるすばんしたひ

うれしいひが いっぱい くるといい

いっぱいしたあとから また うれしいひが

やってくる

(神奈川 市が尾幼稚園)

子ども・母親・保育者

守 永 英 子

四月、新年度が始まると、又、新しい子どもたちとの出会いがある。そして、子どもをばさんで、その親とも出会う。

子どもたちの有りようがいろいろであると同様に、親の方もいろいろである。

新しい集団生活の中で、すぐに友だちを作れる子ども。友だちの誘いに、おずおずと応じる子ども。自分の興味に突き動かされて遊び始める子ども。母親から離れられない子ども……など、さまざまである。

母親の方も、「私、べたべたするの嫌いなんです」と至極あっさりとしている親。黙って、にこにこを見守る

親。母親から離れられずに泣く子どもを抱きあげ、抱きしめる親。言いきかせて、自分から引き離そうとする親。子どもの動きを待たずに、先に指示してやらせようとする親。自分で手を出して世話をしてしまう親。まことにいろいろである。

いろいろな子どもと、いろいろな親と、保育者という組合せの中で、この出会いが、「子ども」にとっても、「親」にとっても、「保育者」にとっても、「よい出会い」となっているように願う。

保育者と親、それは、共に「子どものよき成長発達を願って」出会うものと思われるのに、この関係は、必ず

しも、初めから円滑にいくとは限らない。私にも、苦い経験がいくつもある。

私たちの園では、年に一、二度、担任がひとりひとりの子どもについて、親と話し合う機会を持つ。若かった私は、一生懸命に、園でのY夫の様子を話し、親に協力を求めた。その時点では、事は順調に運んだかに思えた。しかし翌日、Y夫は私に言った。「先生、昨日、ママに、ばくの悪口言ったでしょ。」

このY夫の言葉は、大変に衝撃的で、二十数年経った今も、私は、その時のことを、ありありと思い出すことができる。子どもが、そのような受けとめ方をするのは、母親の言い方が悪い、ときめつけることは簡単である。が、どのような理由があるにせよ、こういう結果を生じたことは、保育者として、自責の念にかられる。私の言ったことを、「親自身の取り組むべき課題」ととらえないで、「教師に言われた」ととらえたために生じたことと思われる。

J子の場合、その「ひがみ」の原因を、私は、その生

育歴の中に探し求めた。しかし、母親の話の中からは手掛りを得ることができなかった。原因の分らないままに、私は、J子のひがんだ行動によって私たちの関係が壊れてしまわないように努力する外はなかった。J子は、かわいがられることが必要な子どもと思われたから、私も極力そのことに努力した。年長組になってしばらく経ってから、J子は「先生、J子をおかわいしないでしょ」と私に問いかけてきた。それは、ひがんだ言い方ではなく、自分への愛情を確かめたい様子に思われたので、私も「かわいいわよ」と答えたが、事実、その頃から、J子は次第に素直さを取り戻し、他の保育者たちが「J子ちゃん、とてもいい表情になったわね」と気づくほどに変って来た。

「実は、J子の祖母が近くにいるのですが、兄の方をかわいがりまして、二人で遊びに行っても、J子だけ先に帰されてしまうのです」と、母親が話してくれたのは、卒業が間近になってからである。これなら、J子がひがむのも当然ではないか。私が原因を探し求めているとき

には、話してくれなかったことを、この時期になって話してくれたのは、卒業が近いという安心感からであろうか。それとも、J子の様子が、望ましい方向へと変わってきたことによって生じた心のゆとりであろうか。

H夫は四才で入園してきた。三年保育の二年目の組に混じるので、H夫が部屋の中でじっと腰かけている姿は、かなり目立つものであった。登園も遅く、働きかけても、はつきり反応しない。何とかしなければ、という思いで、母親に、もう少し早く登園するように求めたが、あまり改善もされない。親のグループでの話し合いの時、もう一度念を押すと、H夫は物を作ることが好きで、朝起きてから登園までの間に製作を始めてしまうので、家を出るのが遅くなる”とのことであった。「製作は好きなようですね」という私の肯定に、「その点を買っていただかなければ」と聞き直った母親の態度には少々驚いた。登園時間は、何回か早い日もあったが、大体は、皆が既に遊び始めてからであった。それでも、二年間の在園の間には、彼なりに、友だちや保育者にも親し

み、自分の活動もできるようになり、楽しそうな表情も見られるようになった。卒業が近くなつて、母親が打ち明けた。「H夫は、三年保育ではいっていた幼稚園では、登園拒否だったのです。」

この二年間、母親も心配だったであろうが、私も随分と気をもんだものであった。J子にしても、H夫にしても、もっと早く事情を聞かせてはもらえなかったものだろうか、と思う。安心して話せるほどの信頼感が、保育者に対して、なかなか持てなかったのだろうか。子どもの様子に安心感が持てるようになったとき、初めて、事情を話す心のゆとりが生まれてくるのだろうか。

子どもに問題を感じる時、親と話合つて協力を求めるのは、通常のやり方であろう。しかし、場合によっては、問題を指摘されることで、親が防衛的になることもある。例え親の協力が確信できなくても、保育者はひとり、忍耐と努力で、課題に立ち向かわなくてはならない。職業的責任感が保育者を支え、自分が変わることで、事態を少しでも好転させようと思える。ひとりで取り組

まなくてはならない孤独な仕事である。

これは、立場を逆にすれば、母親の側にも言えることかもしれない。保育者が、子どもの持つ問題点を指摘し、母親の側に努力を求めるだけで終るならば、母親にとっても、孤独な仕事となる。“子どもの望ましい成長発達を”という同じ願いに向っている親と保育者である。両者が、心を通わせて、歩調をそろえれば、もう少しうまくいくのではないか……と思う。

もう立派な社会人となっているS夫の母親は、「初めての子どもで、何も分らず、随分先生にはいろいろなことを伺って、勉強させていただきました」と今でも感謝してくれる。社交的な含みがあるにしても、実際、保育の後、よくいろいろな意見を求められたことが思い出される。“保育者に協力する”というよりも、“自分の考えを育てるために”周囲のものを上手に利用したと言える。

考えてみれば、幼稚園で、保育者が子どもと共にあるのは、高々二、三年。それに比べ、母親は、密に、長く

続く関係である。保育者の主導のもとに協力するというよりも、やはり、母親自身の、子どもを見る目、育てる力を養うことが大切である。子どもの姿から、子どもが現在ぶつかっている課題は何か、乗り越えなければならぬ課題は何かをとらえ、それに対して、母親自身の果すべき役割を考える姿勢を、母親が持つことは、今後、長く役に立つことである。

そして、母親を、そのように仕向け、支えるのは、保育者の仕事の一つであろう。保育は、子どもを直接に育てるだけでなく、子どもに大きな影響をもつ母親への働きかけも含むものである。子どもと母親の関係の中で、子どもを変えたいと思う時に、母親が変わることで子どもが変わってくるように、母親と保育者の関係の中で、母親を変えたいと思う時には、先ず、保育者自身が変えることが必要であろう。

幼稚園は、“子どもを育てる場”であると同時に、“親も、保育者も共に育つ場”でありたいものである。

(お茶の水女子大附属幼稚園)

教育実習ノート

その五

YさんからK先生へ

五月二十二日（木）雨のち晴
みどり組

いちご摘み

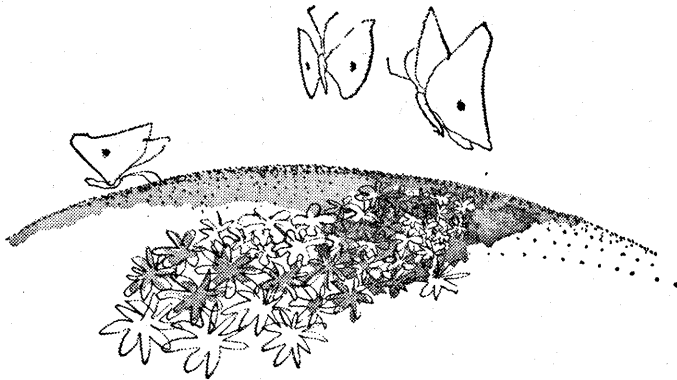
葉っぱの下に隠れてる

青空見たいと顔を出す

大きないちご 赤いいちご

小さないちご 赤いいちご

やさしくつまんでプチッと摘むと



赤い色が目にしみた

赤い汁が手のひら染めた

甘い香りが心にしみた

幼稚園から五分でもう苺畑……、ここの子ども達は自然に恵まれていて幸せである。出して行った机の上で苺の絵を描く。一人が描きだすとつられるようにクレヨンをだしてくる。どの自由画帳も苺の香りでいっぱい、お弁当の時、みんなで食べる、おかわり自由の苺の味は格別——、K先生の「お腹とよく相談してね」の声も聞こえているのかな、三十個分食べたと言ってスモックを真赤にしている。

K先生からYさんへ

子どもも自然の中の一つです。苺摘みの風景は、広々とした畑の中の小さな存在ですが、ここに子どもがいて、苺の赤さが又ひきたつような気が

がします。机をだして行って……苺摘みの手を洗わないうちに、赤く匂っている手でクレヨンを持たせたかったです。一人一人、生き生きとした違った作品が生まれましたね。一つだけ大きな苺を描いている子、苺が画面一ぱいに並んでいる子。青蛙を中心に描いている子。友達ばかり描いている子。と、大人（先生）は満足なのですが……。描きたくない子もいるでしょうし、描くことによってあの苺畑の感動が薄れはしないかと思うのです。反省することはかりですが——。180度、頭を切り替えるとはこの事なのでしょうね。

YさんからK先生へ

七月十日

みどり組

けんちゃんとじゅんちゃんと一緒にトンネルを掘る。「大きな山を作った方がいいよ」「固くしよう」と言われしげちゃんも、まねをして山をたたいている。「早くトンネル」と、すぐに穴を掘

りたいのに待っている。先週、トンネルの中で指と指が触れ合ったとき、とても嬉しそうだったので、私も早く掘りたいと思いながら、男の子達に合わせていた。次は川を作るといいだし、川の道筋とトンネルがほぼできあがった。しげちゃんがすぐに水を流そうとすると、じゅんちゃんが、「工事中のところがあるのでまだだよ」と言う。

トンネルでも川でもいつも早くしようと焦って不完全に終わってしまうのに、きょうはバケツを傾けたまま待っている「いいよ」と言われると、うれしそうに流す。一杯の水では足りないので、じゅんちゃんが汲んで、次はけんちゃん、次はしげちゃんの番かな、と思ってみると、さっとバケツを持って立ち上り、水道のところに走っていく。すごいぞしげちゃん！ 三人の中の自分の位置とおうか、三人の関係が理解されていると思う。友達のことを考えるだけの余裕があり、それは

又、人を思いやる心だと思う。トンネルの中で、じゅんちゃんと手を触れ合わせていたときのしげちゃんの顔——それはそれは楽しそうだった。きょうはとにかく一日中、しげちゃんの変化に驚いていた私です。（驚く、という言い方は失礼ですね）

K先生からYさんへ

今日、一日どのように子どもとかわかったか。それでよかったか。目に見えない内面的な心の動きが見えたか。この大事なことが中心に記されていてよかったと思います。先生になったら、ここを個人の記録に移しかえると、誰が少ないか、誰とかかわっていないか、わかったかがわかります。あくまで自分の明日の保育のステップになるように記していきましょう。

若いお母さんたちへ

はるにれの会

塚田 幸子



シリーズを始めるに当たって――

この四月から、はるにれの会のメンバーが交替でこのページを埋めるようにというお話があったのは、会の発足とほとんど同時、九月のある会合の時でした。私にとっては、三年にわたる米国生活から帰国して十か月の時が流れ、カルチャーショック（浦島太郎現象という方が私にはびったりでした）もようやく収まりかけてきた頃のことでした。実際、頭髪は真白、何かにつけて今の日本の生活と自分の感じ方、行動の仕方との間にあるズレにとまどう日々だったのです。そのため、会合は私にとってストレス解消のおしゃべりの場であったのですが、その雑談のような話の中から、いつの間にか新しい会が生まれ、まわりの人々が動き始めて、気がついてみると、自分は、その動きの渦の中ほどに置かれてしまっていたのです。

会のメンバー、というより、設立に向けて動いた核に

なる人たちは、若い母親たちで、はじめは、子どもの成長、発達を、遊びという視点から、母親あるいは保育者として見つめ、考え合ってきた人たちです。ご存知の方は少ないと思いますが、「遊びをみつめる会」のメンバーたちです。この会は現在も活動していて、出版してからは六、七年になるでしょうか。その中で、私は一番の古手、最年長ということになってしまいました。子どもも中学一年と小学二年というようにずいぶん大きくなり、会にとっても、私のようなメンバーにとっても、今は転回の時期に来ていたのかもしれませんが。

最近では団塊の世代と呼ばれる私の世代は、その幼少期から世の中に対して常に新たな問題を投げかけ、大きな変動のうねりを起こしてきた世代です。それは無意識的にも、意識的にもなされ、この世代の圧倒的な数の多さにその一因があるのだと思います。焼け跡のすしづめ学級の義務教育時代、大学にあっては学園紛争を引き起こした世代と言えはおわかりでしょうか。結婚して最初の子どもが生まれた頃はニューファミリーと呼ばれたり

もしました。世界的に見ても、この戦後生まれのベビーブーム世代は、今になればもちろんひとりひとりで十分その言動によって社会を動かす人もふえています。特別有名というわけではない人たちでも、底流として確実にこの社会にインパクトを与え続けています。

日本では戦後民主主義教育が浸透し始めた世代で、男女共学によって、学生時代までは理想と現実の間に大きな違いのなかった私たちの世代も、女性にとっては、就職、結婚、出産等を契機に、明らかな男女差別という既成の価値観との対立、闘争が始まりました。ひとりひとりを見れば、先鋭的に切りこんで行った人もあれば、既成の秩序を重んじる人もあり、その形は実に多様なものであったと思います。大きな流れとしては、けれども、確実に、現在見えてきた方向に変わってきています。それは、男性の中にも建て前としての男女平等がほんの少しずつでも浸透してきたことや、現実的にのみ対応する経済社会が、労働力としての女性を無視することができず、むしろ積極的な活用を図り始めたこと、需要を掘り

起こし、物やサービスを提供する側が、女性の様々な要求をくみあげてきたこと、そうせざるを得なかったことなどの中にあらわれています。

ただ、今でも、出産、育児は、最大のネックであり続け、本来、そのこと自体は大いによいことであるのに、それを手かせ、足かせと感じる女性がどれほど多いことでしょう。私たちの会は、女性解放を叫んでいるのではなく、最初から子どもの立場に最重点を置いてきたわけですが、そこには、母親の問題が最も密接に結びついてくるのです。

ここで私自身のことになりますが、どういうわけか、子どもを産んでから私の考えはすっかり変わってしまい、どうしても自分の子どもを百パーセント自分の手で育てたいと奮闘することになってしまったのです。出産するまでは、姑や母に子どもを預けてそれまでと同じベースで仕事や研究を続けたいと安易に考えていたのですが、この変化には自分でも驚き、信じ難い思いでした。仕事や研究を捨てる気はないのに、一時でも子ども

を預けていられない自分の気持を素直に全面的に肯定するというのは、たやすいことではありませんでした。

今になってみると、自分が、全力投入して子どもを育てたいと思う気持ちを素直に肯定することができずし、それを押し殺してこなければならなかった女性の苦しさがわかります。それには、自分が年齢をとったことや時代が変わったということもあります。初めて子どもを産んだのは二十四歳でしたし、自分自身で遊びたい心や社会人としての仕事に挑戦したい意欲は大変強く、妊娠して身体的にも精神的にも多くは制限が加わることは大きな抵抗を感じたものでした。時代的には、今よりは結婚した女性に、あるいは妊婦、母親に対して古い価値観が周囲から抑圧的に働いて、その分、余計に束縛されていたと思います。そんな世代の母親たちは、私も含めて、少しずつ新しい動きを作ってきたと思います。様々な道があったことでしょう。

その中で、私自身は大学での専門が子どもの発達や保育であったこともあり、たとえ家庭に専念しても、自分

の子どもや身のまわりで研究を続けていくというものでした。子どもが二人になり、ますます身動きがとれなくなると、そうでもしなければ世の中から取り残されてしまいそうな気がしたのです。私の場合、専門分野であったからなおさら、子育てを他人任せにできなかったというとも言えますが、今のように男女共学で、女性も高等教育を受ける割合が飛躍的に増している時代においては、家事、育児に専念する生活に疑問や不満、不安がない女性というのもまた極端に少なくなっているはずです。私たちのグループでもそう感じている人は多く、子どもを保育所に預けて働き続けている人も少なくありません。そして、子育てに専念している人にも、社会から隔絶され、子どもと自分だけが取り残されていくという孤立感を感じた（感じている）人が多いのです。

幸いにも、「遊びをみつめる会」がそういう孤立感から私を救ってくれましたが、救いの場を見出せずにいる人も多いのではないのでしょうか。私たちはそう思って、今度は、今まさにそんな閉塞的な状況に置かれた母親を

少しでも支援できたらと考えているのです。それが「はるにれの会」発足の動機のひとつです。

会のメンバーには、仕事を持っている人たちもいます。が、仕事自体が保育や教育に関わる人が多く、圧倒的に主婦であり、自身の子を持つ母親たちです。私自身、現在は何の肩書きもない主婦で、母親としてのキャリアはたかだか十二年ですが、それでも、初めて子どもを持つお母さんや、初めて幼稚園、小学校に子どもを入れるお母さんたちは、何らかの助言や励ましを与えることのできる立場にあると感じ、行動を開始したところです。

現代は女性の時代と言われ、翔んでる女性からキャリアウーマンへと言葉を変えて、仕事の上でも女性が男性と対等に能力を発揮することが善しとされるようになってきています。掛け声や揶揄が飛ぶのは、まだ本格的にそういう事態になっていないことのあらわれでもあるのですが、少なくとも方向は示され、その幕あけの時ではあるわけで、そこには新たな問題の展開も起こってきます。それは、出産、育児にまつわる問題で、言葉を変え

て言えば、母性の危機ということになるでしょう。

母性そのものは、母親である（になる）女性にだけあるのではなく、子どもを慈しみ育てる心として、男性の中にも見出すことができますし、子どもの中にも見つけることができる、広く人間にとって普遍的なものだと解釈することができます。

再び体験的な話になりますが、私が最初の子どもを産んだ頃は、世の中が将来に対して悲観的で暗い時代で公害問題などを考えると、果たして、この子どもの未来はあるのだろうか、そのまた子どもは……と、産んでしまっても健康でしあわせな未来を親である自分たちが作り出してやれるのだろうか、と不安にならざるを得ませんでした。子どもが生まれてはじめて、私はそのような遠い未来を自分に関わるものとして強く意識させられ、その未来を自分も人類の一員として良い方向に持っていかなければならない重大な責任があるのだと自覚させられたのでした。そして、そう気づかせてくれた子どもという存在の意義をはっきりととらえることができた気がし

ました。

その後、公害問題は、あるものは多大な犠牲を払った後改善されましたが、完全に消失したわけではなく、常に新しい問題が起こってきて、人類の未来はバラ色一色というわけではありません。かと言って、全くお先真暗というわけでもなく、進歩もあれば、不断の努力によって解決の道があるということもわかってきました。こうしてあらゆる問題が他人事でなく、大人にはすべて自身の、ひとりひとりの関心や努力の対象になるものだということが私にはわかってきました。こういうことを理解することが親になることであり、人間として成熟していくことなのだと思います。人間の一生としては、この段階でも真に成熟、完成ということにはならず、まだ先に老年期があり、最終的にはいかにして死を迎えいれるかという大きな問題が残されています。

もうひとつ体験的に得たことですが、老人と子どもの関わりということも、小説等では昔からひとつのテーマになっているように、人間にとって大切なもののように

す。子どもを持つと、子どもに本を読んでやったり、お話を聞かせたりするようになりますが、私はもともと子ども向けのと言われるお話が大好きで、よく、自分の方が夢中になってしまったりします。その中でも忘れられない思いが幾つかありますが、それは、ダイジェスト版や子ども向けに改められたものでなく、オリジナルな形で書かれたものに多く、そのひとつに『アルプスの少女ハイジ』があります。確かに少女時代にも何度か読んだことがあったのですが、大人になって読んだ時に、全く新しい面白さが発見されたのです。それは、ハイジのお

じいさんやクララのお医者様の心でした。彼らにとってハイジは、自然や神とのかけ橋のように存在していたのです。そのことを私は、子どもの頃には全く理解しなかったか、あるいは、子ども向けに改められ省略された内容の本を読んだのか、今もって知る術ありませんが、子どもに本を読み聞かせることには、こんな意味があったのかと、しみじみうれしく思ったものです。そしてこの本の作者が意図していた深い意味を知ることができて

本当に良かったと思いました。こうして私は、何年も何十年も経て、再び同じ本を読むことの価値をも教えられ、幾重にも感激してしまったのです。

ハイジを育てることによって信仰を取りもどすことのできたおじいさんの例に見るように、人間にとって母性というものは欠くことのできない極めて大切なものなのです。その大切な母性を育てる努力を私たちは決して怠ってはなりません。はるにれの会は、言いかえれば、母性を育てる会ということになるでしょうか、少なくとも出発した意図はそこにあるのです。

こう書いてきたからと言って、子どもを育てることは苦手だわというお母さんに、無理矢理、良い母親になるようになどとお説教がましいことを言うつもりは、私には全くありません。共働きの家庭の子どもが非行に走る確率が高いなどというまことしやかな神話も樋口恵子さんがその著書で論破していますし、母原病などという言葉を流行させて、やたら母親に不安や自責の念を起こさせた現象も今は静まっているように見えます。(母原病

という言葉のイメージと本の著者の意図する内容とは別であることをお断わりしておきます)

むしろ、私は、これからも、右のようないたずらに母親の不安をかきたてる情報のはんらんしないようにと、願わずにいられないのです。こんな危険な情報の洪水の中で、子どもを育てていくのは、決してたやすいことではありません。昔に比べると多くの女性が、長期間学校教育を受け、先生という存在からは情報を安易に肯定的に取り入れてしまう傾向を持つようになっていたり、活字を信仰する人もはるかに多くなっていたりします。そしてまたテレビなどの映像による強烈な印象も母親に揺さぶりをかけてきます。ゆっくりと考えてみる時間がなくなつて、自分の感性を眠らせたまま、外からの動きに押し流されてしまう人がふえています。子どもを育てることは、今の世の中のスピーディな動きとは対照的にまるでスローモーションのようなゆったりとした流れの中にあるのですが、その流れは、静止しているかのように見えてしまいます。そこに焦りやいら立ちが生じる原因

があるのでしょうか。思えば子どもを育てる人々には、困難な時代です。その人々をさらにせき立て突っ走らせようとする動きの何と多いことか。何か、どこかが、おかしいと心の片隅で思いつつも流されていってしまいがちです。私たちはその何かがおかしいという感じ方を大切に、そこを支点にして、大きな流れを正しい方向に持っていかなければと思います。

母性は大切なものでそれを守り育てていかなければならないという一般論はよくわかるけれど、具体的に個別の悩みをどう解決していったらいいのかということになると、手だてがわからないということが多いでしょう。そういう方たちもどうぞ会に加わって下さい。あるいは、手紙や電話で相談をお寄せ下さい。

〒一一六 東京都荒川区南千住七―二四―二四―三〇
六

電話 (〇三) 八〇六―七三二六

子どもたちのこと

大橋 利恵子

つっぱりとやさしさと

(T君 5才男児)

話をしている時にクラスの中で一番反応が素早く適切なのはT君である。実行力もあり話し合って決めたことなど、すぐに行動できる。遊びをおもしろくするアイデアや手段もたくさん持っていて、一緒に遊ぶと楽しい相手である。先日「できるかな」というテレビ番組で牛乳パックを使って家や車を作ることをやっていた。見

終ったT君はさっそく牛乳パックを集めてきてつなぎ始め、数日かかって床と屋根と柱だけのものを作った。その頃、ちょうど周囲の子どもはじゅず玉を糸に通しネックレスを作っていた。たくさんできたネックレスを見てくじびきをしようということになり、準備に追われていた。くじびきの場が出来て、お客様になった子たちがはじめると、そのすみの方で何やら時々笑い声がするようになった。そばに行ってみると、T君がその床と屋根だけの家の中にすわりこみ、片手をあげ、片手を前に出

してしかめつつらをしている。そして、女の子たちが前でポンポンと手をあわせている。どうやらお地藏様のまねらしい。へんな遊びだなと思って見ていると、何とお地藏様が、女の子がやるのと同じようにポンポンと手を打つのである。ほったに手をやればお地藏様も、ほったに手をやる。そのたびにみんながきやつきやつと笑っているのである。「先生このお地藏様おもしろいよ。まねするからまねっこ地藏なんだって」おまけにまねっこしてほしい人はちゃんとおさい銭を入れなくてはならないようになっていた。

T君にはこのように人がおもいつかないような事を考へ出す所があるので周囲もついついT君の言う事を聞く方にまわる。その為かT君はいつもクラスの中でいばっている。けんかをしたらしいして強くないのに口が達者なのでみんなかなわない。そんなT君にも弱味はある。スポーツである。あまり得意ではないのでやりたがらない。その中でもプール遊びは特に苦手だった。今年ががんばって泳げた子に赤や緑のボタンを渡した。そういう

時には一番上のものを欲しがるT君である。口だけはいさましく「ぼくは緑ボタンをもらうぞ」と言っているが、顔を水につけるのが大きすぎ。それでもT君は泳げないと言われるのはプライドが許さないのか、毎日少しずつがんばり、夏休み前には赤ボタンまでこぎつけていた。

この頼もしいT君が調子にのって人の悪口や反抗的な口の聞き方をするのに一時すごく困ったことがある。でもある日ふとおもしろい関係に気づいた。T君はえらぶっているけれど本当はすごく甘えん坊で、一日に一回はひざや肩に乗っかりに来る。そういった甘えがスムーズにできた日は彼の口はおとなしく、どうも不安定な時の口の悪さはかなりひどいことに気づいたのである。どうやらT君はかなりのつっぱりらしい。それ以来、彼が悪口や反抗を始めたなら、頭ごとかかえてしっかりと抱いてしまふことにしている。

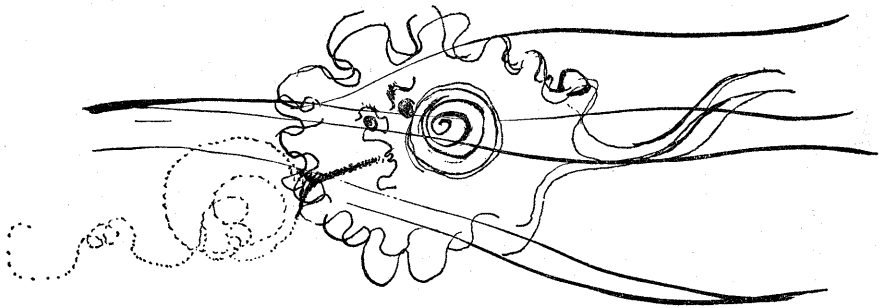
また、園ではあまりみせないT君のやさしい姿をお母さんの手紙から知らされた。

「幼稚園に行っている間にとっても残念な出来事があったと子どもに話した。

死んでしまった二羽の小鳥と対面した時、齒をくいしばっていたが、家に入り部屋の隅で顔をうずめて泣いていた。庭に穴を掘り、小鳥を埋める時は、彼の目から大粒の涙が溢れ、夕飯を食べる元気もなくなっていた。」

T君の心の中にあるこのやさしさは宝物、そして本当は甘えの強いT君が肩いからせているのをみるたび、何かほえましいものを感じずにはいられない。あの子は何でもできるいばった子だという片方の見方をして、ますます、T君をつっぱらせてしまっていたら……と思うと、T君のもう一方の姿や心の中を少しでも見つけられてよかったと思わずにいられない。

(岐阜北幼稚園)



もうひとつの

保育園

浜口 紀恵

息子の通っている保育園は私立の無認可保育園である。どこが公立と違うかというと、まず建物からして、ごく普通のしもたや造りである。第一、庭と云うものがない。仕方がないから、アヒルのお散歩宜しく、ゾロゾロ列になって出向いて遊ぶのである。涙もろい曾祖母など、今だに公立保育園の広々とした敷地を目にするごとに、「哲ちゃんも、こういうりっぱな所で遊ばせ

てやりたいねえ」と涙ぐまんばかりである。ところが、本人はむしろ、あちらこちらの公園に行けることで、愉快を感じている様子であるから、母親としては、一向に、「りっぱな保育園」に申し込みをする必要も感じないまま、3年がすぎてしまった。

子供たちの遊び場は、保育園わきの道端であったり、目と鼻の先の公園であることもあるし、わざわざ20分も歩いて、それも、途中四車線道路を横切って遠くの児童公園まで出向くこともある。春の桜の盛りには、総勢30人程の少人数なのを幸いに、園長先生が自家用車で何往復かして下さり、給食持参で、お花見に連れて行って下さったことすらある。臨機応変に、遊び場を変えられるのも、私立の小規模ならではない、私などは、子供たちもさぞおもしろい事であろうと呑気にありがたがっているが、父母の中には、事故を心配して苦情を云う者も、案外多く居るようである。

哲郎の現在の悩みは、ヒーローごっこで、とかく怪獣の役（つまり、やられ役）にまわされることである。4

才児のすみれ組5名と5才児のひまわり組2名が、ひとまとまりにみどり先生のクラスとなっている。毎日の中で、年長組のなおき君やりゅうじ君は、自然、親分となって遊びの差配をする。当然良い役まわりはとってしまふのである。おまけに、哲郎は泣きべソなので、日に一回はなおき君にこづき回されて大泣きをする。

「僕にはかないっこないよ。だって、なおき君はもう6才で、ボクはまだ5才なんだもの。アーア、早く僕だって6才になりたいよ。」と妙にあきらめきつたことを云う。

確かに幼児期の一才の年の差は大きい。クラス別保育の時間がもうけられているとはいえ、基本的に、2才から6才までの子供が、一つ部屋ですごしている暮らしの中では、年功序列の秩序が生まれるのも当然かもしれない。さらに、一クラスの人数があまりに少ないので、大きい子、小さい子いりまじって遊ばないことには、遊びが発展していかないという事情がある。年令別のクラス分けを離れて、園の子供たち全体が遊び仲間であり、良

くも悪くも、親分子分の間柄にある。そういう訳で哲郎も年長組の横暴に憤慨することはあっても、一方で年長さんを尊敬し頼っているものである。特になおき君は哲郎にとっては、絶対的存在で、哲郎がくやしい思いを味わった時の決まり文句は「許さないぞ」なおき君に云いつけてやる。」という、少々ふがいないものである。なおき君のいうことならば、正しいと信じてしまう。時には、なおき君の号令で、散歩の道すがらに「男はつーよい、女はよーわい」のシュプレヒコールを叫んで男どろしの連帯を確認しあったりもしているのである。

親分格の2人が春には卒園していく。また来年度からは園舎も鉄筋三階建てに新築され、階上を遊び場として使えるようになるという。哲郎自身年長組に進級し、保育園での暮らしの様子が大きく動いていきそうである。母親としては、一日の大半をすごす場である保育園が、今まで通りに、泣いたり怒ったりといったことが自由に心から出来る、伸びやかな場であり続けてくれるようにとばかり、ねがっている。

「迷い子」の話

M・H

新しい子どもたちが入ってくる。新入園児にとって、この月は、もしかしたら、うろうろと心もとなく過ごす、「迷い子月」ではないだろうか。道がどう折れ曲っているのか、どこへ行ったらよいのか、皆目わからないままに、じっとしていることも出来ない。ただ、とことこと歩き廻る……。

しかし、考えてみれば、私どもも、また、折あるごとに「迷い子体験」をくり返しながら、今日まで歩いてきたと言えるかも知れない。幼児期の迷い子、青年期の迷い子、そして、老いを迎えるときも、人はまた、迷うのである。

◆

私たちが子どもだった頃、大通りを渡ったあちら側や、川の向こうは、果てしなく広がる見知らぬ街だったから、うっかり迷いこんだら、二度と家には帰れなくなりそうに思っていた。しかし、それでいて、私たちは、しょっちゅう、その未知の街に入りこんでみたいと憧れてい

たような気がする。薄暗がりの中に謎を秘めた見知らぬ世界は、いつも子どもだけに感受される特別の電波を送り出して、私たちを惑わし続けていたのかも知れない。

そんな誘惑に抗しかねると、子どもたちは、時折、通りを越え、橋を渡って行った。時には、ハメルンの笛吹き男が通り過ぎた跡のように、あたりの子どもたちが一斉に姿を消してしまつて、大人たちを驚かすこともあった。しかし、大方は、彼らは何とか帰り道を見つけ出し、思いがけない方角からひょっこりと現われて、心配していた大人を呆れさせるものだった。

「どこへ行つてたの？」

「どこつて？」

「こんなにおそくまで」

「おそかった？」

こんなとりとめのないやりとりの末に、大人たちは、こう付け加える。

「知らないところに行っちゃ黙目よ」と……。

しかし、子どもたちは、また、性こりもなく、どこかへ迷いこんでいくだろう。

未知という薄明かりに身を隠して、子どもたちとだけ密やかに音信を交わす、この惑わしの主を、「永遠の原母」と呼んだ人がある。私どもは、かつて、外界とも、あるいは他者とも、隔てられることのないまろやかな生を、穩かに充足して過ごしていた。たとえば、それを、母胎と不可分であつたあの未生以前の狀態として考えることも出来るかも知れない。そんな時代への志向を、「母胎回帰願望」などと術語で把えることが流行っているが、「未知」への迷いこみを、一見、逆のように見えるこの願望を重ねて考えてみようというわけなのだ。

柳田国男が、『山の人生』の中で語っている幼い日の迷い子体験は、まさしく、こうした「母探し」の旅であつた。柳田は、その体験を、次のような一文で始めている。

る。

「これも自分の遭遇であるが、あまり小さい時の事だから他人の話のような感じがする。四才の春に弟が生まれて、自然に母の愛情注意も元ほどでなく、その上にいわゆる虫気があって機嫌の悪い子供であつたらしい。その年の秋のかかりではなかつたかと思ふ。

(以下略)

四才の「私」は、ふと母親が目を放したすきに家を出て、県道を南に向かつてとことと歩き出したのであつた。三、四時間後に、二十何町離れた松林の中で発見され、幸いに顔見知りの農夫が連れ戻ってくれたが、「私」は、しきりに「神戸の叔母さん」の所へ行きたいとくり返していたという。もちろん、神戸には、彼の「叔母なる人」は在住しない。従つて、それは、恐らく、「私」の中で幻としてのみ存在する「母性的なるもの」であつたろう。弟のために失なわれた「母の優しさと甘やか

さ」、彼が愛して止まなかつた、そして、その愛の中に浸つて満ち足りていた、至福の時代への回帰願望、それが「神戸の叔母」という幻を生んで、彼を誘ひ続けたのであつた。従つて、見知らぬ世界へ出掛けていくという、いかにも遠心的な行動が、実は、「母なるもの」に回帰するという、極めて求心的な行動であつたりする。子どものもの、というより、人間の、というべきかも知れないが、こうした行動は、しばしば、見かけ上の意味を裏打ちする、もう一つの意味に支えられているものだ。「迷い子体験」などは、その典型例と言えるかも知れない。従つて、子どもたちは、自身の行為を充分に説明出来ないだろう。

「何故、そんな所に行ったの？」

「何故でも」

「何をするために？」

「何って？」

永遠に続くのは、こんなやりとりであろうが、子どもには説明のしようもない出来事であるに相違ない。「求心力」に誘なわれつつ、それを「遠心的行為」でも表現するという、この両義的な表出について、自身で合理的に把握しようすべもないのである。柳田は、それを、「神隠し」という絶妙のメタファで扱っている。

しかし、彼らの遠出と迷い子行が、遠心力の表現として、より素直に実行されることも珍しくない。すなわち、「新しい世界」の自力での探索という……。

堀辰雄は『幼年時代』という自伝的小説の中に、たかちゃんという仲よしの女の子と一諸に遠出する挿話を挿入している。夏も終りに近いある日の午後、家人の午睡の際を見はからって、二人はソツと家を抜け出すのだ。

この場合、幼い二人には、ちゃんと目標が定められている。たかちゃんの父親が働いているガラス工場まで、二人っきりで行ってみようというのだ。広い空地の向こう

には、大きな赤い煙突が見えかくれしている。それを目指して、旅をしてみよう。しかし、水たまりだらけのその空地は、入りこんだ二人に、決して親切ではなかった。ちゃんと見えている煙突の方へ、容易に彼らを導いてはくれないのだ。水たまりを避け、足もとをかばいながら、うろうろと迷い歩くうち、二人には、それが、いじ悪な「魔法の煙突」のように見え始める。幼い二人にとって、この遠出は、少々、無謀すぎたのであろう。

結末は、とりあえずは、工場にたどりついた二人が、不機嫌な父に追われるようにして、再び、空地へと逃げこみ、情ない想いで家に帰り着くことで終る。しょんぼりと歩き続けながら、ふり返った二人の瞳は、ガラス工場の上に広がった黒い入道雲を、自分たちを脅かすものの不気味な正体のように把える。歩いても歩いても近づいてくれない煙突も、嵐を前触れする入道雲も、いずれも、彼らに対して敵意をむき出しにしている。「新しい世界」は、決して幼いものに優しくはないのだ。慣れ親んだいつもの庭先こそ、二人にとってふさわしい場所だ

というのだろうか。

しかし、一度、未知の中をさ迷い、新しい世界に目標を定めた彼らにとって、以前と全く同じ時間は、回復され得べくもなかった。夏の終りのある日、あたり一帯を襲った洪水は、二人の住家を押し流し、それと同時に、たちちやんと「私」は、不可分に過ごした二人の幼年期に別れを告げる。すなわち、避難する人々でごった返す大川端で、慌しく別れを告げて、それぞれの避難先へと散っていったのだ。以後、二人は、「男の子」と、「女の子」という別々の世界を、遠く離れた別々の場所できり広げることになり、ままごとと訣別した「私」は、絵草紙の魅力に取り付かれていく。

改めてふり返るとき、二人に訪れたあの「迷い子体験」は、慣れ親んだ既知の世界と、新しい未知の世界との境界を往還する、「間の体験^{あいだ}」であったことに気付かされる。お父さんの働く場所を一目見たい、あの煙突の所まで二人だけで歩いて行こう、幼い二人がこう思い立ったとき、二人は既に、これまでの世界にだけ安住する

ことを許されない、新しい時の訪れを予感していたに相違ない。

子どもの国の地図の上には、無数の「未知」への入り口が書き込まれている。それは、必ずしも、通りの向こうや川の彼方とは限らない。かつてそのしるしは、人気がない森や朽ちかけた空家、あるいは土蔵や押し入れの中などにも付けられていた。いま、その入り口は、マンションの屋上や非常階段の踊り場に、また、砂利採取場の穴ぼこや空地に捨てられた冷蔵庫の扉に、そして時には休日のビル街やデパートの雑踏の中にまで、ポツカリと口を開いて彼らを招き入れるのだ。子どもたちは、アッという間に見えなくなってしまうと、時には、本当に戻ってこないこともあるだろう。

私たちが、情報知識を総動員し、経験世界の網の目を隙もなく広げて、世界を「既知」で覆い尽くそうとするとき、子どもたちは、それら知り尽くされた風景の中を退屈げに歩き廻るかに見せながら、その裏側から発信さ

れる秘密の電波をいち早くキャッチし、こっそりとしるしを付けて、時の訪れを待つに相違ない。「ココニ、未知へノ入りロアリ」と……………。

堀切直人は、その名著『迷子論』の中で、次のように呟いている。

『未知の土地』とかりそめに呼称しうるような特殊の地帯がわたしたちの棲まうこの世界のどこかに実在するのではないだろうか。この世界のどこかに——いや、厳密に言えば、この世界をはずれたどこかに、わたしたちの思ひもかけぬような別の世界が隠れひそんでいるのではないだろうか。』



新入園児にとって、新しい生活は、薄闇の中に果てしなく広がる「未知の世界」であるに相違ない。しかし、隙もなくあたりを覆い尽した情報の網の目は、子どもたちをも余さず包みこんでいるから、彼らは、新しい世界に対してペタペタと「既知のしるし」を貼り付けてしま

う。旧く、「幼稚園に行ったら先生の言うことを聞く」、

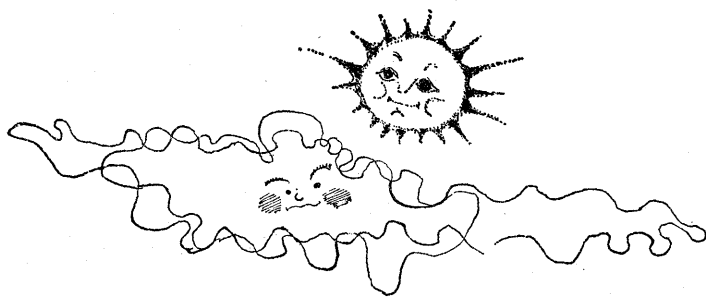
「名前を呼ばれたら元氣よく返辞をする」、旧く、「お弁当を残さない」「やたらに泣かない」など……………。

しかし、一通りの情報知識でとりあえずは新しい世界を覆い尽くしたとしても、類い稀な「未知発見家」である子どもたちは、それこそ、知っている筈の風景の裏側に、生々しく息づいている「未知」を感受して、戦^{おの}き、不安に脅えながらも、興奮して探索に乗り出さずにはいられない。そして、よくわからない世界を、あてどなく歩き廻るから、彼らは「迷い子」になる。一見、慣れ切ったように、楽しげに遊んでいる彼らが、その実、うろろと迷い歩いている「迷い子」であるとは……………。

しかし、あちらこちらと散々歩き廻るうち、その軌跡はすべて「既知」としてしるしづけられる。その軌跡は迷路状であればあるだけ、「既知」の範囲も広がるだろう。そして、それらの「既知」は、単なる情報知識によるそれと異なり、自身の身体で描いた地図であり、身体で獲得した王国であるから、彼らが取り結ぶ関係は、充

分に親密で深く確かなのだ。

こうして、全体が混沌の海であった新しい世界に、「既知」の拠点が確保されたとき、既知の出現によって新たな「未知」が分泌され、双分化された世界は、その境界に新しい「迷い子領域」を用意して子どもたちを誘うだろう。堀切直人の眩きように、この世界をはずれたどこかに「未知の土地」は隠れひそんでいるのかも知れない。しかし、子どもたちは、それを世界の果てまで探しに行くのではなく、常識的秩序の支配する日常世界のただ中で、容易に「未知」への入り口を発見し、軽やかに身を躍らせて、その世界へと足を踏み入れていくのではないだろうか。



四月、「出会い」の季節の訪れである。

幼い人たちは、新しい「人」や「もの」の出会いに、感動し、戸惑い、時に戦いたりもしながら、その世界を広げていくことだろう。因みに、M・ブーパー流に言うなら、人間は、物質とは出会い得ないということになるかも知れない。しかし、幼い人たちは、恐らく「もの」との間にも、お互いを開いて「人同士のように」出会うという、稀有な関係を成立させ得るのではないか。そんな彼らのありようが、「人」と「もの」とを明瞭に区切って範疇化する、私どもの分類概念を挑発する。秩序の枠にはまりこんでいない、新しい子どもとの出会いとは、私どもにとっても、貴重なよみがえりの時間なのである。

考えてみれば、「雑誌」を作るということも、様々な出会いの機会を提供することに他ならないのではないか。すなわち、書き手と編集者との出会い、誌面で

の書き手相互の出会い、そして、一冊の雑誌を媒介としての書き手と読み手との出会い……。本誌が、いわゆる保育界の常連とでもいふべき諸氏の他に、他の分野から様々に新しい書き手を要請してご登場頂くのはこの所以である。保育指導者として著名な方々との出会いは、他の雑誌や書物上で、あるいは研修会その他の席上で、容易に実現可能であろう。しかし、本誌にご登場頂く、一見、幼児研究とは無縁に見える方々との出会いは、もしかしたら、「一期一会」とでもいふべき貴重なものであるかも知れないのだ。

これまで編集を助けて下さった皆川美恵子氏は、新しい書き手に寄稿をお願いする名手であった。氏の労に感謝しながら、新人小澤蒼子氏のフレッシュさに、新しい期待を寄せたいと思う。氏の参加によって、本誌により匂いやかな色が添えられることを願っている。
(H)

幼児の教育 第八十四巻 第四号

四月号 ◎

定価三五〇円

昭和六十年三月二十五日 印刷
昭和六十年四月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレイベル館にお願いいたします

イラスト保育実技シリーズ①

幼児の発表会 その準備と ための発表会 進め方

館 紅・著



子どもの小さな遊びから、劇遊びへと展開させるコツがよく分かる。

本書は、子どもと「発表会」に取り組む先生のために、発表会の基本的な考え方、出演種目の決め方、脚本の選び方、スケジュールの立て方、保育者同士の協力のしかたを詳説してあります。
☆著者脚色の脚本を9編紹介。

A 5判・216頁・定価1,500円

保育イラストブック

絵／江川厚子・奥谷ます子・冬野いちこ・ふじたひでみ フレーベル館 編



園だよりのアシスタント！
楽しいイラストがどのページにも！

- ルーズリーフ式で原稿作りがスピーディにできます。
- やさしい線画で、色ぬりもできます。
- オリジナルイラストのヒントにもなります。

A 5判・104頁・ルーズリーフ式・定価1,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル館の8大月刊誌

新企画がつぎつぎと登場します。

①—情操

キンダーブック

年中児向けの生活絵本です。季節感と創造力をたいせつに「心のやさしさ」を育てていきます。

(4月号 特別ふろく付) 団体購読価 月250円

キンダー

おはなしえほん

年長児向けの本格的なお話絵本です。豊かな創造力と美しい心を育てます。

(上製本) 団体購読価 月300円

②—観察

キンダーブック

年長児向けの生活絵本です。観察力と遊びの心をポイントに、子どもたちの好奇心を高めます。

(4月号 特別ふろく付) 団体購読価 月250円

がくしゅうおおぞら

遊びながら楽しみながら、考える楽しさ、知る面白さが知らず知らずのうちに育っていく絵本です。

(母親向け別冊付) 団体購読価 月300円

しぜん-キンダーブック③

身近な昆虫や動植物など、自然界の不思議を正確で美しい絵や写真で感動的に紹介する科学絵本です。

(上製本) 団体購読価 月300円

ころころえほん

園生活で初めてふれる、年少児のための明るい絵本。幼ない子とのスキンシップが楽しめます。

(厚紙製本) 団体購読価 月250円

大判になり、増頁!!

キンダーメルヘン

年少・年中児向けのお話絵本で、幼児らしい夢を育てる楽しい絵本です。

団体購読価 月250円

保育専科

指導計画と指導の実際

4月号から本誌と指導計画との2本立て。保育資料豊富。定価据置き。別冊は年3回発行です。

定価400円 (別冊とも年間7,800円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館